

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

The Establishment of the Peabody Academy of Science

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 守屋, 毅 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004343

ピーボディー科学アカデミーの成立

——モース研究の一環として——

守 屋 毅*

The Establishment of the Peabody Academy of Science

Takeshi MORIYA

This paper discusses a part of my study of Edward Sylvester Morse. An examination of the processes of the establishment of the Peabody Academy of Science, which later became the Peabody Museum of Salem, is the main topic.

Some biographical descriptions about Morse and his friends on the Foundation of Peabody Academy of Science show, in part, how the Academy was established. The entire processes have never been described, either in America or Japan. In this paper I attempt to describe the complete story of the foundation of the Peabody Academy of Science, and Morse's role in that process.

Edward Sylvester Morse, who participated in the foundation of the Academy, spent most of his life as a researcher working for the museum, except for the period when he was away from Salem. After his death, a large collection of ethnological materials, "The Morse Collection", was left to the museum. Most of the collection is related to Japan.

However, since it was assembled and taken to the Academy in the 1880's, later than the period of concern to this paper, it is not discussed here.

- | | |
|-------------------|----------------------|
| 1. はじめに | 6. 寄附金のゆくえ |
| 2. セイラム学派——その形成—— | 7. ピーボディー科学アカデミー |
| 3. セイラム東インド海運協会 | 8. 博物館開館まで |
| 4. エセックス研究所 | 9. セイラム学派——その栄光と挫折—— |
| 5. ジョージ・ピーボディー | |

* 国立民族学博物館第1研究部

1. はじめに

1.1.

本稿は、筆者のエドワード・シルベスター・モースに関する研究の一環としてあらわされる。そして、おそらく、いささか冗長になるであろうことが予想される、この文章は、モースにとって一生の仕事場となったピーボディー科学アカデミー Peabody Academy of Science, すなわち今日のセイラム・ピーボディー博物館 Peabody Museum of Salem の設立をめぐる諸経過の叙述を目的としてつづられようとしている。

従来、ピーボディー科学アカデミーの創設は、モースやその仲間たちの伝記的記述には、すくなくとも関説される事柄である。しかし、それらの伝記のなかでピーボディー科学アカデミーに関する記述は、いずれも断片的であって、その創設の全過程を展望する論稿は、日米を通じて、管見にとぼしい。このような現状にかんがみ、本稿では、ピーボディー科学アカデミーが誕生する経過を、できるだけ詳細に叙述し、あわせてその創設時期におけるモースの役割を点描しようとおもう。

したがって、この考察において、1867年という年は、格別の意味をもつ。——というのも、日本でいえば明治維新の前年（慶応3年）にあたり、アメリカでは南北戦争が終結してわずか2年目のこの年が、アメリカ合衆国マサチューセッツ州エセックス郡セイラム市に、ピーボディー科学アカデミー——この時点で、この名称があったか否かは、のちに検討する課題となるが——が創設され、あわせて、わがエドワード・モースが、その職員（助手）に任命された年にあたっているからにはかならない。時にモース29歳の春であった。

そのピーボディー科学アカデミーは、のちにセイラム・ピーボディー博物館と称をあらため、現在にいたる。その創設に参加したモースは、以来、なかに一時の中断をはさむものの、彼の研究者としての生涯のほとんどすべてを、この博物館とともにすごすことになった。しかも、彼の死後なお、ピーボディー博物館が、モースののこした膨大な収集品——いわゆるモース・コレクションを今日につたえていること、そしてその大半が日本関係の民族学資料でしめられていることは、筆者自身、すでに幾度か紹介する機会をもった [守屋 1983, 1985a, 1986]。

もっとも、本稿における筆者の関心は、やがてモースの収集品を収容することになるピーボディー科学アカデミーが、いかにして成立したのかという点にしばられる。

モース・コレクションの形成とそのピーボディー科学アカデミーへの収蔵は、1880年代のことであって、1867年を節目とかんがえる本稿の対象時期からすれば、やや後年のことに属するのである。

1. 2.

1900年というから、すでにピーボディー科学アカデミー博物館長の職にあったモースは、同博物館の100年にわたる歴史を回顧するスピーチのなかで、つぎのようにのべている。

1867年、偉大な銀行家であり慈善家であったジョージ・ピーボディーの寄附によって、ピーボディー科学アカデミーが創設された。建物は、東インド海運協会から譲渡された。また同協会博物館を構成していた貴重な資料を、あたらしい民族学にふさわしいかたちで展示するために、ギャラリーやケースが整備された。同協会が永久に寄託したこのコレクションに、さらに、一般的な博物学資料とエセックス郡の貴重な動植物コレクションがくわえられた。それらは、ヘンリー・ウィートランド博士、フレドリック・W・パットナム教授、その他の人々のひとかたならぬ努力のおかげで、エセックス研究所が我々の手にゆだねたものなのである [MORSE 1900: 4]。

ここには、本稿が叙述しようとしているピーボディー科学アカデミーの創設経過が要領よくとかれている。あらためて整理すると、ピーボディー科学アカデミーは、

- (1) ジョージ・ピーボディーの寄附を基金として——ピーボディー科学アカデミーの名が、その寄贈者を記念するものであることは、あえて指摘するまでもない——
- (2) 東インド海運協会の建物および所蔵の民族学資料をひきつぎ、
- (3) さらにエセックス研究所からゆずりうけた博物学資料をあわせた博物館として創設された。
- (4) なお、エセックス研究所から資料を移管するについては、ウィートランド、パットナムらの尽力があった。

——ということができらるであろう。

上記の事実は、本稿をなすにあたっての予備的な知識を提供するとともに、本稿が対象とせねばならない範囲をさししめすものにほかならない。順不同に列挙すれば、それは、ジョージ・ピーボディーという人物、東インド海運協会およびその建物と所蔵資料、エセックス研究所のなりたちとその性格、さらにモースの回想に名前のでたウィートランドやパットナムの事歴が、本稿における具体的な課題ということになるのである。

このような対象をあつかう本稿にあつて、筆者が依拠した基本的なデータは、おお

むね、以下の3種の文献からえられた。

第一に、関係する諸機関、エセックス研究所、ピーボディ科学アカデミーなどの記録である。もっとも、我々が利用できるのは、公刊された「所報」「年報」の域でないのであるが、それらに記載された事項だけでも、詳細に点検すれば、従来みおとされていた、おおくの事実をすることができる。また、それらの機関の「年史」「目録」および研究紀要、パンフレットなどの記事が、これに準じるであろう。

第二に、当事者の手紙や日記である。これらについては、ドロシー・ウェイマンによる伝記『エドワード・S・モース』[WAYMAN 1943]に豊富な紹介がみられ、それ自体が一種の書簡集・日記抄の性格をおびる。なお、本稿における同書の引用は、以下、日本語版[ウェイマン 1976a, 1976b]により、適宜「伝記」の略称をもちいることがある。

また、R・W・デキスターの一連の論文が、モースの仲間たちの手紙や日記を豊富に提供していて、参考になる。本稿の話題に直接かさなりあうデキスターの関連論文は、おそらく20編にちかひであろう。本稿は、その目的からして、ほとんど関係者の私的な生活にふみこむことをしないので、かならずしもそれらを十分に活用する機会がないかもしれないが、ただ、筆者が本稿を執筆する直接のきっかけは、デキスターの丹念な仕事に接することによってえられたものであることを、いいそえておかねばならない。

第三に、当事者あるいは当事者にちかひ立場にあった人物の回想・覚書である。さらに、一次資料を収録する——もしくは一次資料によったことがあきらかな——歴史的叙述もしくは伝記の類が、これを補足する。本稿がとりあつかう対象は多岐にわたり、それゆえ、関連する一次資料は広域に分散している。したがって、それらを集成した既往の研究は、筆者におおくの便宜をあたえる。

筆者は、これらの基本的文献をセイラム・ピーボディ博物館およびプリンストン大学図書館の蔵書によって閲覧することをえ、また不足するものはプリンストン大学図書館インター・ライブラリー・サービスを介してコピーを入手することができた。各機関の関係者にあらかじめ感謝の意をあらわしておきたいとおもう。

1.3.

付言すれば、これまで、日本においても、またアメリカにあっても、モースの事跡を参照するにあたっては、まず、ウェイマンによるモースの伝記(前掲)にならうのを通例としてきた。

この著書は、モースの本格的な伝記として唯一のものであるばかりでなく、かねて名著のほまれがたかく、また日本語訳もあって、はばひろい読者をえてきた。ことに、欧米の伝記の正統にしたがって、モースの日記や手紙を駆使し、その本文をふんだんに引用しているところに資料的な価値があり、それらの諸資料がいまもって公刊されていない現状にあっては、刊行以来40年あまりをへてなお、依然、たかい評価をたもっている。本稿もまた、ウェイマンの記述から恩恵をこうむるところ、すくなしとしない。

しかし、これは伝記作者の文章にままありがちな弊なのであるが、ウェイマンの記述には、そのもとになった出典の明記をかくところがおおく、また、子細によめば、筆のはしりすぎとおもわれる部分、あるいは前後に相矛盾した記載も、すくなからずみだされる。本稿において対象となる箇所にあつては、とりわけ、その傾向がいちじるしいようにみうけられる。したがって本稿では、しばしば、その本文に批判的な検討をこころみることになるであろう。本稿は、その本来の課題とあわせて、ウェイマンの記載を再点検する契機をはらむものとする。

ちなみにいう。後述のような事情から、全米にはくピーボディーと名のつく博物館が、筆者の承知するかぎりでも、3つ存在する。すなわち、ハーバード大学アメリカ考古学人類学ピーボディー博物館、エール大学ピーボディー博物館、およびセイラム・ピーボディー博物館である。ただし以下、本稿において単にピーボディー博物館と記す場合は、とくにことわらないかぎり、セイラム・ピーボディー博物館をさすものとする。

あわせて、ピーボディー科学アカデミーについても、便宜上、これを科学アカデミー、あるいはアカデミーと略称することがある。

2. セイラム学派——その形成——

2.1.

1867年春にピーボディー科学アカデミーが創設されたというのは、いわば突出した出来事のひとつにすぎなかった。

むしろ、最初に指摘しておかなければならないのは、これを前後する1860年代後半から70年代の初頭にかけて——それは、かぞえかたによっては、足かけ5年にみたない短期間ではあったが——、セイラムにおいて、ちいさな、しかしアメリカ科学史のうえで記憶にとどめらるべき、<学派>が形成されていた事実であろう。いまかりに

それをセイラム学派とよぶ。

ドロシー・ウェイマンの『エドワード・S・モース』第8章は、創始期のピーボディー科学アカデミーにおけるモースの動静について記述する章であるが、その章は、「4人の狂気の若者たち」と名づけられている。しかして、「狂気の若者」とされた4人こそ、筆者のいうセイラム学派のメンバーをさしているのであった。すなわち、フレドリック・パットナム、アルフェウス・ハイアット、アルフェウス・パッカー・ジュニア、そして、わがエドワード・モースの4人である。もっとも、私見をもってすれば、これにケールブ・クックをくわえなければならぬが、なぜか彼の存在は無視されがちである。

ちなみに、「4人の狂気の若者たち」という表現は、ウェイマン自身が示唆するように、“Old Houses of Salem”と題された著者不明のリーフレットのなかの一節からとられている [*Old Houses of Salem* 1870: 9]。戯文ともいべきこの文章の著者は、モースその人であったのかもしれない。モースの没後、その秘書マーガレット・ブルックからひきついで資料をもとにモースの著作目録をつくった A. P. モースは、これをモースの作品として、リストにくわえているのであった [MORSE 1927: 18]。

いずれにせよ、全員が、当時、30歳になるやならぬ若者たちであった。ウェイマンが彼らの年齢を20代の初期としているのは [ウェイマン 1976a: 262]、彼女のかんちがいである。

彼らは、その出身からして、ひとまず動物学者といってよかった。しかしその関心とする領域は、どうみても、今日われわれのいう動物学の範囲におさまるものではない。博物学者という、いまでは、いささかふるめかしくなった呼称こそ、彼らにもっともふさわしい称号であったかもしれない。彼らの学問は、動物学のほかに考古学・人類学・民族学などへの関心を、いまだ未分化のままに潜在させていた。ハイアットやパッカーのように動物学者として大成したものがあるかとおもえば、パットナムがしだいに考古学・人類学に研究の重心をうつし、モースが民族学から宇宙学にまで関心を拡張していくように、この学派のメンバーは、やがてひとくちに動物学者とはいえなくなっていくのである。

それは先のこととして、ピーボディー科学アカデミーの創設をめぐる、彼ら、わかかわかしい知性の、くるおしいばかりの活躍ぶりは、とりあえずウェイマンの達意の文章にゆだねて、ここでは、ピーボディー博物館の記録を参考に、あらためてパットナムらのアカデミーとのかかわりを摘記すると、以下のごとくである [WHITEHILL 1949: 173-174]。

フレドリック・パットナム<1839~1915> 1867年=博物館責任者, 1868~75年=
博物館長兼学芸員

ケールブ・クック<1836~80> 1867~75年=助手, 1875~80年=学芸員

アルフェウス・ハイアット<1839~1902> 1867~70年=学芸員

エドワード・モース<1838~1925> 1867年=助手, 1868~70年=学芸員, 1880~
1916年=博物館長, 1916~25年=名誉館長

アルフェウス・バックカード・ジュニア<1839~1905> 1867年=助手, 1868~76年
=学芸員, 1876~79年=博物館長

つぎに彼らの、その後の進路を記しておく。

フレドリック・パットナム 1876年, ハーバード大学ピーボディー博物館学芸員に
転出, のち同教授。

ケールブ・クック 1880年, 死亡。

アルフェウス・ハイアット 1871年, ボストン博物学協会博物館学芸員に転出。の
ち, マサチューセッツ工科大学・ボストン大学古生物学教授。

エドワード・モース 1871年, ボードン大学教授, 1878年, 東京大学教授などをへ
て, 1880年, ピーボディー科学アカデミーに復帰, 同館長。

アルフェウス・バックカード・ジュニア 1880年, ブラウン大学動物学教授。

2つの一覧表を対照してみれば、いうところのセイラム学派は、19世紀後半のアメリカ博物学界を代表するナチュラリストたちの青春の一齣であったことが、了解されるであろう。

2. 2.

もっとも、1867年春に彼らがセイラムにあつまっていたという事情を説明するためには、さらに、その前提となる、いくつかの事柄にふれておかねばならない。彼らはともに、ハーバード大学にあって、アメリカにおける近代生物学の父ルイ・アガシー教授にまなんだ同窓生であった。1850年代後半から60年代前半にかけてのことである。当時の学生仲間には先の5人のほかに、アンダーソン・ベリル（のちにエール大学動物学教授）、ナサニエル・シェイラー（のちにハーバード大学地質学教授）などの顔もみえた。

ウェイマンは、かいている――。

1859年から60年までのアガシー教授の学生助手の名簿を読んでいくことは、とりも直さず40

年後のアメリカ博物学上の著名な人名、即ち模範的教科書の著者、素晴らしいコレクションの主事、東海岸のすべての大都市の大博物館長の人名を読みあげることになるであろう。天才的な若者たちがアガシーの足もとに、自然の引力で引き寄せられたとすれば、同じ重力でアガシーの賢明な選択が加えられていたにちがいないのである [ウエイマン 1976a: 92]。

アガシーはスイス人であったが、1846年、動乱のヨーロッパをのがれて渡米し、1847年以來、ハーバード大学で教鞭をとっていた。そして学生たちは、アガシーの60数年にわたる生涯で、おそらく、もっともかがやかしい時期に際会していたにちがいはなかった。アガシーの伝記の著者であるジュルス・マルコー——彼はまた、アガシーの友人でもあった——が、1858年から61年を、アガシーの生涯における一つの期間としてとりあつかい、これに3章分——最大のページ数にあたる——をあてたのは、まさしく当をえていた [MARCOU 1896: 63-143]。

おりしもハーバード大学では、アガシー指導のもとに、比較動物学博物館の建設が進行中であり、アガシーとアガシーをしたう門下生とは、その創設準備を通じて、きわめて親密な関係をたもった時期にあたっていたからである。

もう一人の伝記の著者であるエドワード・ルリーは、つぎのように記した [LURIE 1960: 314]。

すべてが、かがやける若者たちであった。(中略) アガシーは、何人かの博物館助手のために給料の支払を用意し、動物学会館(学生たちの宿舎となっていた建物-筆者註)を提供する費用を自費でまかない、その機関で、彼らのすべてに無償の教育をほどこしたのである。

2. 3.

しかし、1860年代にはいって生じたいくつかの出来事が、その関係を急速に崩壊にみちびいた。

ひとつは、1861年の南北戦争の勃発である。外国人であったアガシーと、アメリカの、それもおもに北部出身の学生たちとでは、おのずと、この内乱に対するシンパシーに差が生じるのは当然であった。出征を志望する学生たち——そして事実、何人かの学生が兵役についた——の態度を、アガシーはにがにがしくおもった。それは、彼がいままさに実現しようとしている、あたらしい博物館の仕事の中断を意味するものにほかならなかったからである。教授は、学生たちが戦況を報じる新聞をよむことすら、許可しなかったという [ウエイマン 1976a: 211]。

ふたつには、ダーウィンの進化論をめぐるアガシーの立場があった。ダーウィンの『種の起源』が公刊されたのは、1858年のことである。その衝撃は、ボストンの科学界におおきな論争をまきおこし、ボストンはロンドンについて第二の論戦の舞台とな

った。アガシーは、反進化論の中心人物であった。牧師の子にうまれたアガシーは、古典的な学説を堅持した。植物学者エーサ・グレイと地質学者ウィリアム・ロジャース——彼らはアガシーの旧友であった——は、ダーウィンの説を支持した。1860年度のボストン博物学協会の「会報」は、その会合における彼らの論争をつぶさに記録している [BOSTON SOCIETY OF NATURAL HISTORY 1860: 231–232]。一方、感受性ゆたかな若者たちのあいだに、この衝撃的な新説はしだいに浸透していった。アガシーの学生のひとりであったモースは、やがて日本で最初に進化論を講義する人物となる。

しかし、このふたつが、師弟の関係を崩壊させた決定的な原因であったとはみなしがたい。南北戦争の影響は全米的なものであって、両者のあいだに固有の出来事ではなかったし、アガシーの弟子たちが進化論に傾斜するのは、かなりあと1870年代にはいつてからのことだったからである [DEXTER 1979a]。

その点では、モースの日記をつぶさに検討したウェイマンが、目ざとく、「一塊のバター」に師弟間の紛争の発端をみいだしたのは、さすがに、するどい。彼女は、当時、学生たちの寄宿舎になっていた動物学会館の管理人と学生たちが、ひとかたまりのバターのおおきさをめぐって喧嘩となり、学生たちの予期に反して、アガシーが管理人の側にたち、ために学生たちが動物学会館をでる、でないという騒動にまでなった事件を紹介している [ウェイマン 1976a: 160–163]。

この事件は、いわば氷山の一角にすぎなかった。師弟のあいだにしばしばおこりがちな些細な確執の蓄積が、みつつ目に、そしてもっとも直接的な師弟離反の理由として、指摘されなくてはならなかったのである。より敷衍していえば、この確執は、はやくも、わかくして研究者としての自立を指向しはじめた俊英たちと、あくまでも彼らを自分の管理・指導のもとにおこうとする教授との関係において把握されるべき性格のものであった。

モースの学友たちの当時の手紙には、しだいに彼らがアガシーに対してつららせていった不満が、あからさまに表明されていたのである [DEXTER 1965]。

最初にアガシーのもとをさったのは、モースであった。1861年の年末、モースは故郷のポートランドにかえり、結婚した。そしてポートランド博物学協会の仕事に従事しつつ、動物画の画工として、自活の道をさがしはじめることになる [DEXTER 1967]。えてしてモースの離反は、比較動物学博物館におさめた彼の個人的なコレクションに対する代金支払に起因していたように理解されがちである。

しかし彼は、1861年12月30日、すなわち彼がアガシーのもとをさった日の日記に、つぎのようにかいた。

先生は自分の本心の姿を見せた。人が彼にへつらい、何も望まず無欲に生きることに満足する限り御機嫌なのだ。しかし人が独立を主張すると、たちまち苛立ち腹を立てるのだ [ウェイマン 1976a: 227]。

コレクションの代金は、「一塊のバター」と同様、それ自体は皮相なことだったのである。日記は、さらにつづく。

この年の終りに、2年間いた比較動物学博物館と縁を切った。私はあらゆることを学んだ。そして教授が与えて下さった学問に対しては恩義を感じている。しかし他の事柄では先生の行為を心から非難したい [ウェイマン 1976a: 228]。

ルリーによれば、このとき、アガシーの息子アレキサンダー・アガシー——彼もまたルイ・アガシーの学生のひとりであったが、終始、父に忠実であった——は、モースのあとにつづいて、おおくの学生が父から離反するであろうことを予測していたという [LURIE 1960: 313]。その予測はあたった。

1863年、アガシーが提案した博物館の勤務規則をめぐる、師弟のあいだは、もはや回復不可能なまでに冷却してしまった。アガシーの提案した規則は、博物館に勤務するものの研究成果や収集品を個人の業績にせず、すべて機関に帰属させるという内容のものであった。

1864年から65年にかけて、あるものはみずからすすんで、あるものは職をとかれ、ハーバード大学におけるあたらしい研究機関——比較動物学博物館の創設に情熱をかたむけた彼の門弟たちは、すべてアガシーのもとからいなくなった。学生たちは、師に失望した。またアガシーは、これからのち、アメリカのわかい学生を信頼しなくなった。彼は、学生のさったあとの比較動物学博物館の運営を、つぎの世代の学生たちにではなく、すでにエスタブリッシュされた学者たちの手にゆだねるのである。

そしてその直後、アガシーのもとをさった青年たちのうち、5人までがセイラムに結集し、一派をかたちづかったのであった。アメリカの科学史家は、このうごきに対して<セイラム離反>すなわち“Salem Secession”という表現をあたえる [DEXTER 1965]。“Secession”とは、あたかもおなじ時期、南北戦争に際して南部諸州が合衆国から分離したのを表現するとき、歴史家のもちいる用語にはかならない。

2.4.

ところで、ウェイマンが1867年のモースの様子を「4人の狂気の若者たち」としてえがいたのは、創設時のピーボディ科学アカデミーにあって、モースのしめる位置が、いまだ4人のなかのひとりにすぎなかったことをものがたる。

セイラム学派の、そしてピーボディー科学アカデミー設立の主役は、モースではなかった。もし、主役とよぶにふさわしい人物がいるとしたら、それはフレドリック・パットナムをおいて、ほかにいない。ピーボディー科学アカデミー博物館の初代の館長は、パットナムその人であった。

また、このアガシー門下の失意の同窓生がセイラムにあつまってくるについても、パットナムの存在とはたらきがおおきかったとかがえられている。学生時代に、すでに彼らのあいだでパットナムが指導的立場にあったことは、あの「一塊のバター」事件以来、学生たちが師のアガシーと対立したときには、いつもパットナムが彼らを代表して折衝にあたり、事態の收拾につとめていた事実からも、容易にうかがえるところであった。

セイラムは、パットナムの生まれ故郷であった。彼は1837年、エセックス郡の名門の子として、この町に生まれ、良家の子弟にふさわしい教育を地元の私立学校でうけた。彼は、早熟であった。16歳にして、はやくもエセックス郡の魚類について、ついで鳥類についての研究を発表していた。我々はそれをエセックス研究所の「所報」によってみることができる [PUTNAM 1856ab]。少年時代以来、エセックス研究所のメンバーであり、またその運営にも関係してきたのである。

その彼が、アガシーをしたってハーバード大学へいったのは、1856年のことである。そこでアガシーをたすけて比較動物学博物館の創設に参画するが、師弟の間に軋轢が生じたことは、すでにのべたとおりである。彼は、1864年、アガシーの比較動物学博物館の助手をやめ、セイラムにかえった。

そしてその年、エセックス研究所から、同研究所の博物館管理責任者の職をあたえられた。管理責任者に着任後は、同研究所博物館の事業のすべてを指揮し、出版物の発行にあたるなど、精力的な活動をおこなっている。エセックス研究所の「所報」をくっていると、彼が着任した1864年以降、同研究所におけるパットナムの指導的な役割が手にとるよううかがえるが、ここではおおくを省略する。ただ結果からみて、彼のもっともおおきな仕事は、エセックス研究所から独立した、もう一つの研究機関——それがピーボディー科学アカデミーに実現することになる——の設立であり、同時に一般むけ科学雑誌の刊行——それはセイラム学派の機関紙ともいべき『アメリカン・ナチュラリスト』に実現した——であったことを指摘しておけば、さしあたりことたりる。

いずれにせよ、パットナムは、こうしたセイラムでの仕事に、学生時代の仲間を勧誘したようにみうけられる。

彼らのなかで、最初にエセックス研究所にポストをえたのは、パットナムとおなじくセイラム出身のケールブ・クックであった。彼は、モースのハーバード時代の日記にしばしば登場しながら——我々はそれをウェイマンの引用によってしることができ [ウェイマン 1976a: 139, 143]——、これまで、前後の履歴がもうひとつはっきりしない人物であり、また仲間うちでも一段ひくくみられていた形跡もあるのだが、エセックス研究所には、はやくから関係していた。1836年にセイラムに生まれ、1853年17歳で創設5年目のエセックス研究所のメンバーとなった。「所報」に掲載された各年度の職員録は、彼がハーバード大学へいくより前の1856年に博物学部門学芸員に就任し、さらにハーバード時代の1857年からはキャビネット・キーパーを兼務していたことをつたえている。

しかし、彼はアガシーの命をうけ、1859年以降、外地にあった。すなわち、1859年、アガシーは彼をブラジルのパラに派遣した。比較動物学博物館の標本を収集するためであった。そして1860年から65年にかけてはアフリカ東海岸のザンジバルおよびマダガスカルに滞在することになった。

この仕事の過程で、アガシーとのあいだに意志の疎通をかくところがあったのは、ハーバード大学にのこっていた、ほかの学生たちの場合とことならなかった。遠隔地のことゆえ、資金の補給もとだえがちで、そのつど、クックは故郷エセックス研究所の幹事ウィートランド博士——この人物については、のちにくわしくのべる——に窮状をうったえる手紙をおくり、援助をもとめた。しかも、クックは、現地でマラリアにかかった。しかし、アガシーはクックの仕事ぶりに不満であり、目的を達成するまで帰国をゆるそうとしなかった。そのアガシーを説得し、彼をよびかえたのは、これもウィートランド博士の奔走の結果である [DEXTER 1970, 1979]。

病身のクックは、現地で1年半ばかり静養したのち、1865年の夏、セイラムにもどり、エセックス研究所に博物学部門学芸員として復帰した。

このクックにつづいて、1866年の夏から秋にかけて——おそらくピーゴディーによる寄附の可能性が濃厚になった時期に、のこりの3人がセイラムにやってくる。ウェイマンによると、「1866年の春に、フレッド・プットナム（パットナムのこと—筆者註）はかつての級友であるモース、ハイアット、そしてパッカードに対して、秋までには全員セイラムで雇われるから他と契約しないように、との手紙を書いていた」という [ウェイマン 1976a: 257-258]。その言葉どおり、エセックス研究所は1866年8月9日の定例会議で、ハイアットとパッカード（ともに、それまではボストン博物学協会の学芸員）の同研究所学芸員への就任を承認したことが、「所報」に記録されて

いる。モースの着任の時期が記録にのこっていないのは不審とすべきであろうが、おそらくその年の年末までに——はやければ9月には——、モースもまた、エセックス研究所に学芸員として籍をおいたはずである。エセックス研究所は、1866年末に、パットナムを編者にして『博物学者名簿』を発行したが [PUTNAM 1866]、そこに登載された5人の肩書は、いずれもエセックス研究所学芸員となっているのである。

とりわけモースは、そのころ、あたらしい仕事をもとめる必要にせまられていた。——というのも、モースは、ほかの仲間たちとちがって、はやくにアガシーのもとをさり、出生の地であるメイン州ポートランドにあって、同博物学協会の管理責任者の任にあった。ところが、1866年7月4日 [BARRY 1982: 15] におきた大火によって協会が建物と収集品をうしない——ちなみに、この協会は以前にも火災で壊滅的な打撃をうけており、モースの仕事は、その再建にあったのだが——、ためにモースは研究と収入の場をともなうばわれてしまったからである [PORTLAND SOCIETY OF NATURAL HISTORY 1869]。

モースは、1866年9月には、セイラムにきていた。そして1年半ばかりのちの1868年早々、彼は、セイラム市リンドン・ストリート12番地に家をたてた。これが、モース生涯の〈ホーム〉となる [ウェイマン 1976a: 259]。

3. セイラム東インド海運協会

3.1.

セイラムは、マサチューセッツ州の中心都市ボストンから北東へ15マイル、複雑な海岸線の入江に面して位置する町である。現在では、夏の観光シーズンのにぎわいのぞけば、ニュー・イングランドの、ありふれた、しずかな地方都市でしかない [守屋 1983, 1985b]。

しかし、その歴史はふるく17世紀前半にまでさかのぼる。メイフラワー号がプリマスに到着したのは1620年であったが、それからわずか6年後の1626年に植民が開始されたこの町は、「マサチューセッツの母なる町」とよばれてきた。そして18世紀後半から19世紀の初頭にかけて、すなわち、アメリカの独立戦争を前後する時期に絶頂をむかえた、港湾都市セイラムの繁栄は、この国の歴史に、重要な1ページをくわえることになった [ROBOTTI 1948: 15-17]。

日本における海事史研究の第一人者である金井円は、当時のアメリカの様子を、つぎのようにかいている。

(独立戦争後の-筆者註) ニュー・イングランドには、ふたつの大きな動きが目立った。アパラチア山脈を超えて、ライフルと斧とコーンの三種の神器をたよりに西へ西へと一家あいたずさえて移住する農民の動きがそのひとつであった。(中略) そして第二に、大西洋からインド洋、地中海、太平洋へと富を求めて船出する漁師や商人たちの動きがあった [金井 1979: 13-14]。

セイラムは、海へむかうニュー・イングランドの中心に位置する港の一つであった。アメリカの海事史家は、「セイラム貿易の時代」という言葉をもちいることがある。セイラムの海外貿易は、一時代を画したのである。

1799年というから、セイラムの全盛期にあたるが、その年の9月、セイラムの船のりたち22人の発議によって、セイラム東インド海運協会 East India Marine Society of Salem が設立をみた。以下、Whitehill [1949] に収録された資料、およびその叙述を参考に、この協会の沿革について概観しておく。

セイラムには、船主の団体として、すでに1766年創設のセイラム海運協会 Marine Society at Salem があった [OSGOOD & BATCHELDER 1879: 119]。それが船長もしくは船主であること以外、とりたてて会員資格をとわなかったのに対して、この東インド海運協会は、えらばれた船のりの団体を目ざしていた。

東インド海運協会は、会則冒頭の規定によって、同協会の会員になるには、

- (1) セイラムの住人であることはもとより、
- (2) 船長か指揮官の経験をもつこと。
- (3) および、喜望峰もしくはケープ・ホーンをこえて、東インド貿易に従事した実績を有すること。

——の3条件をともに充足していることが要求されたのである。

セイラムにすむ船のりはすくなくなかったとはいえ、この3条件をともにみたすことは、当時のセイラムにおいて、名誉ある船のりの資格とかんがえられていたであろう。この条件にかなう人は、そうおおくはなかったとおもわれるが、創設時に協会に参加したメンバーは30人にのぼり、同年中に加入したものをくわえれば初期のメンバーは40人をかぞえたのである。港湾都市としてセイラムが擁した船のりの、すぐれたキャリアをものがたる数字であった。

セイラムにおける海外貿易は、1902年に完全におわりをつげた。これを境に、協会もしだいに使命をおえるのであったが、その歴史を通じて、合計402人も船のりが、メンバーとして名をつらねることになる [WHITEHILL 1949: 160-169]。

会員は、入会に際して25ドルをはらい、年6回の会合に出席して、そのつど、25セントが徴収された。これが会の基本的な収入となった。初期の記録は、この協会がも

よおした豪勢な酒宴や晩餐の様子をつたえている。

会計にのこされた領収証から判断するに、これらの宴会には、ワインや酒がふんだんに用意された。(中略) 1808年11月の年次総会の勘定書は、食前のワイン、パンチ、ジン、ブランディーと菓巻に17ドル、そして100人分の正餐が250ドル(1人2.5ドル)となっているばかりか、その5日まえには、6ダースのマデイラ、2ガロンのブランディー、半ガロンのジンに、53.5ドルがはらわれていたのであった [WHITEHILL 1949: 19]。

また、彼らがおこなった盛大な野外行列も、ながく人々の記憶にのこるものであった。

その初期には、年次総会をまえにして、100人以上のメンバーが町をねりあるいたものであった。彼らは、中国の官吏、インドの王様、アラビアの皇帝のようにきかざり、極東の骨董品や乗物をおしたてていた [PHILLIPS 1954: 37]。

豪勢な宴会といい、人目をおどろかす派手な行進といい、それらは、とりもなおさず、東インド海運協会に加入したセイラムの船のりたちの、ゆたかな財力を誇示するものにほかならなかった。

3. 2.

ところで、この協会は、1800年の法人化に際して、目的とする3つの事業を明示した [EAST INDIA MARINE SOCIETY OF SALEM 1821: 3-4]。

すなわち、

- (1) 援助を必要とするかもしれない、死亡した会員の未亡人および子供に対して、協会の収益金から補助すること。
- (2) 航海の向上と安全に寄与するであろう事実と観察を収集すること。
- (3) 喜望峰およびケープ・ホーンのむこうで発見された自然・人工のめずらしい資料の博物館を創設すること。

——の3つである。先行の海運協会が、慈善と航海の進歩といった漠然とした目的しか標榜していなかったことをおもうと、東インド海運協会の、この明確な事業目的の設定もまた、両協会のあいだに、一線を画すものとなった。

(1) において、まず私たちは、この協会の相互扶助組織としての性格をみることができらるであろう。この目的は、協会の歴史を通じて、かわることがなかった。創設から150年ちかくのちになっても、なお協会は、最後の会員の未亡人に対して、必要な援助をおこなっていたのである。

もっとも、従来、同協会のはたした貢献は、とりわけ(2)において、たかく評価さ

れてきた。航海上の情報を組織的に収集するところみは、セイラム東インド海運協会の、この事業をもってアメリカにおける先駆的な例とかがえられるからである。アメリカ合衆国議会が、ジェファーソン大統領の提案にしたがって、世界的な沿岸調査隊の派遣を決議するのは1807年であり、それが実施されるのは、さらにおくれて1816年以降のことであった。

このような国家的なうごきに先だて、一民間団体にすぎない同協会は、航海上の情報を収集しようとしていたのであった。そのために、会則は、航海からもどった会員が、そのつど、詳細な航海記録 *Journals* を会長に提出することを義務づけていた。協会に提出される記録には、岬の方向と距離、島・岩礁・浅瀬の緯度・経度、水深・潮流・気流、そのほか報告するにたると判断された異常事態・暴風・事故について、彼らの観察が記入されていなければならなかった。

しかも協会は、提出書類の書式を一定にさだめ、印刷した用紙まで用意した。内容の精度をたかめ、情報の均一化をはかる配慮であった。また協会は、報告書の管理にあたる専任の職員を配備したのである。その結果、協会に提出された記録は、散逸することなく、今日につたえられることになった。

1831年までに協会に提出された航海記録は、すでに90冊をかぞえていたのである [EAST INDIA MARINE SOCIETY OF SALEM 1831: 33-42]。そしてその第一報が、はからずもニュー・イングランドの船舶フランクリン号の日本への寄港を記録していたのは、その後のセイラムと日本のふかい関係をおもえば、偶然とはいえ、注目するにたる事柄といわねばならなかった。それは、ペリーの日本来航に先だつこと半世紀もまえのことだったのである。

3.3.

もっとも、(1)(2)は、当面の話題に直接関係するものではない。我々は、その(3)、すなわち、セイラムの海の男たちが、自分たちの手で、博物館をつくろうとしていた事実こそ注目しなくてはならない。協会の会則は、会員に対して「有益な函書、あるいは貴重な標本資料」の収集の義務を課していたのであった [EAST INDIA MARINE SOCIETY OF SALEM 1821: 9-10]。

そもそも、当時のセイラムは、異国情緒にあふれる町であった。協会の事業をまつまでもなく、船のりたちが世界各地からもちかえた品物が充満していたのである。ちょうどそのころ、セイラムでそだったキャロリン・キング女史は、数十年後に当時のセイラムへの追憶をかきつづって1冊の本にした。いま、そのなかから目につくま

まに、ひろいだしてみよう。

実際、その当時、コショウ列島は、私たちの浜辺のすぐそばにあるようにおもえました。

(中略)

人々は、インドや中国に<冒険>をおくりました。それらは、すばらしい茶器、豪華な東洋の毛織物、うつくしい象牙細工に実をむすんだのです。

(中略)

そして、ほとんどの家にも、めずらしい東洋の記念品があったものです。私の乳母の家にも、マントル・ピースのうえに、ガラスにはいった肖像画が二つかかっていました。それは、乳母の御主人がインドからもちかえたもので、トルコの男女の姿がえがかれていたのです [KING 1937: 30-31]。

東インド海運協会は、セイラムの町にあふれる品物を、より組織的に収蔵し、それをもとに博物館をつくろうとかがえたのである。ここに、海の男たちの収集品によってつくられた——という、ユニークな成立事情をもつ博物館が出現することになった。

協会が博物館をつくることをすると、船のりたちの収集熱は、いっそうたかまった。ふたたびキング女史の回想をひくならば——。

はじめのうち、コレクションはすくなく、関心もよびませんでした。しかし、しだいに、商船のオフィサーばかりでなく、乗組員ひとりひとりが、彼らの愛する博物館のために、外国の骨董や産物をもちかえることを、その航海の特別の目的にするまでになったのでした [KING 1937: 28]。

彼らセイラムの船長たちは、後年、アーネスト・ドッジ——彼は、1931年からピーボディー博物館に勤務し、のち館長の職についた——によって、「キャプテン・コレクター」の名をあたえられることになる。

二つの岬のかなたの自然と文化に関する博物館を確立したいという協会の希望の結果、世界中から、種々雑多な資料がおしよせてきた。中国・インド・ザンジバル・東インド地方、そしてオセアニアの島々からの品物が、協会の部屋に、ところせましとあつまっていた [DODGE 1945: 30]。

ここにしめされた地域こそ、はからずも、セイラム商船の広域にわたる活動範囲をものがたっていたのである。

なお付言すれば、今日、セイラム・ピーボディー博物館は、この東インド海運協会の発足した1799年をもって、開館の年としている。それは、すでに簡単に指摘しておいたように、そして詳細はあらためてのべるように、同協会の建物とともに、そのコレクションがピーボディー科学アカデミーにゆずられ、さらに1905年にピーボディー科学アカデミーがピーボディー博物館と名をあらためた——という経緯にもとづくもので

ある。そして、この計算によれば、現在、全米で活動する博物館のなかで、ピーボディー博物館は、もっともながい歴史をもつことになるという [WHITEHILL 1950: 8-9]。

それはさておき、同協会は、設立後まもなく、市内の目抜通り——エセックス・ストリートとワシントン・ストリートの角のステアーンズ・ビルに部屋をかりて、さしあたりの本部とした。その最初のホールはたちまちにしてうけいれた資料で一杯になり、展示にも手ぜまになってしまった。創設から3年のあいだに、協会がうけいれた資料は、メンバーから提供されたものばかりでなかった。はやくも噂をききつけて、海外の人々からも贈物がよせられるようになっていたのである。

そこで同協会は、1804年、エセックス・ストリートの、もともとセイラム銀行のためにたてられた建物の、ちいさなホールに本部をうつした。これにともない1805年には、地元の新聞セイラム・ギャゼット紙が、同協会の博物館の一般への開放をもとめて、公開質問状を掲載するという一齣もあったという。

もっとも、東インド海運協会が、当初の目的にそって、そのコレクションを博物館にふさわしいかたちに整理するのは、1820年代になってからであった。

すなわち、1820年の6月の会合において、協会は、初代の博物館責任者としてバス博士を選任した。バス博士は、1821年、最初の資料目録を作成する。この年、同協会は100ページばかりのパンフレットを発行し、そのうち70ページをさいて、同協会所蔵の資料2269点のカatalogを掲載したのである [EAST INDIA MARINE SOCIETY OF SALEM 1821: 30-100]。そのなかには、太平洋の島々からセイラムにはこぼれてきた品々が大量にふくまれていた。これらの島々がまだ欧米の文化の洗礼をうける以前の様子をつたえるもので、質的にもすぐれた水準をしめしていた。事実、今日のピーボディー博物館においても、オセアニア・コレクションは、各方面から注目される資料の一群となっているのである。

ただし、当時のコレクションにふくまれた極東の文物は、オセアニアの資料とくらべて、いちじるしくみおとりがした。ドッジの先の文章によると、「中国のほか極東地域からもたらされた物のおおくは、土産物か貿易品にすぎない」という。それは「不幸なことに、1800年代はじめの船のりたちは貿易以外に関心がなく、彼らが海外の品に対する趣味と識別の目をかいていた」ばかりでなく、「いうまでもなく、当時、中国は高度な文明国であり、中国の官僚や商人は、彼ら自身が収集家であり、なかなかの目ききであって、それらを手ばなすことをきらっていた」からであるという [DODGE 1945: 30-31]。

いずれにせよ、東アジア資料の質のひくさは、さらに半世紀のち、館長の職につい

たモースが、日本・中国に資料収集の旅におもむく、とおい理由のひとつとなったのである。

3. 4.

ついで1824年5月、同協会は、展示場をそなえた、あたらしい会館の建設に着手した。会館の建設と運営のために、同協会は資本金1万5000ドルを用意して、別会社 **Salem East India Marine Hall Corporation** を設立した。この会社についても多少は知見をえているが、いまは煩雑をさけて、省略にしたがう。

そして翌1825年10月にはエセックス・ストリートに面して、正面を花崗岩でおおった、煉瓦造2階建の堂々たる建築が完成した。およそ間口45フィート(13.5メートル)、奥行100フィート(30メートル)の建物であった。創設以来四半世紀にして、協会は自前の建物をもつことができたのである。この建物が、やがてピーボディー科学アカデミーがゆずりうけ、ピーボディー博物館が現在にいたるまで使用しているイースト・インディア・マリン・ホール **Salem East India Marine Hall** にほかならなかった。

同協会は、このホールの1階をアジア銀行 **Asiatic Bank** と東洋保険会社 **Oriental Insurance Company** に貸与し、その貸賃をもって会館の運営費にあてたのである。今日なお、ホールの正面の軒には、創建当初のままに、そのふたつの企業の名前がきざまれている。

そしてホールの2階が集会場と展示場になったのである。この建物の完成によって、協会が創設時に目的とした博物館の建設は、名実ともに実現した。こうして、協会のコレクションをおさめた博物館は、一般に、それも無料で公開されることになった。

見学者が2階へのぼってくると、階段の両側には、椅子にすわったインドの彫刻があった。そしてまた、ホールの中央にも、ひくい鉄の手すりにかこまれて、やはりインドの彫刻がおかれていた。階段のうえには乗物が展示され、さらにそのうえに船の模型があった。両側の壁面には棚がならび、協会の書籍とともに、貝や鉱物の標本がおさめられていた。棚のうえの壁には、肖像画や風景画がかかっていた。奇妙なかたちの鎗や武器の類も、うまくかざられていた。ホールの南と北の窓ぎわに、おおきな展示ケースがあった。

そして、階段をあがった正面、ホールの西側に、さしわたし13フィートばかりの円卓がおかれていた。このテーブルをかこんで、協会のメンバーの会議や会食がおこなわれたのである。

この博物館の開設は、セイラムの人々のあいだに好評のうちにむかえられたばかりでなく、全米に話題を提供することになった。この博物館についてふれた旅行記や回想録はすくなくない。そのライターの中には、セイラムのうんだ文学者ナサニエル・ホーソーンもいた。彼は1832年にこの博物館をおとずれたときの印象をもとに、エッセイ“A Virtuoso’s Collection” [HAWTHORNE 1841] をかいた。そのかきだしは、「私は時間があいたので、あたらしい博物館ですごすことにした」とある。セイラムの市民がプラリとたちよる博物館だったのである [GOODSPEED 1946]。

この間に、博物館の収蔵品の数も着実に充実した。1831年に発行されたカタログには4299点の資料が収録され [EAST INDIA MARINE SOCIETY OF SALEM 1831: 43-178], 1837年版のカタログには、さらに371点の増加が報告されることになる [EAST INDIA MARINE SOCIETY OF SALEM 1837: 11-24]。

3.5.

しかし数年をへずして、はやくも協会は、この博物館の維持管理の費用と来館者への対応に困難をおぼえるようになっていた。当初は入場無料だったものを、一転して1837年から、協会は大人1人25セントという、当時としてはかなり高額の入館料を徴収することを決定した。これによって多少とも博物館の経営経費を捻出するとともに、応接に人手のかかる来館者の数を制限するためである。

セイラムのみじかい繁栄期は、すでにおわろうとしていた。しだいに大型化する船舶に、セイラムの港はせまく、あさかった。おおくの船主や貿易業者が、この町からボストンやニュー・ヨークに転出していった。そのなかには、海運協会の現役の理事長もふくまれていた。セイラムの衰退は、誰の目にもあきらかだったのである。

ここでも、ホーソーンの小説『緋文字』の冒頭「カスタム・ハウス」の一節を引用するのが、効果的であろう。

50年前（1800年代初頭をさしている-筆者註）、いわゆる老キング・ダービーの時代、私のうまれた町——セイラムの港の突堤は、繁栄をきわめていたものだ。しかし、今やその突堤には、かたむきかけた倉庫がならんでいるばかりで、経済活動がおこなわれている気配は、ほとんど、いや、まったくみうけられないのである。もっとも、たまにはさびれたその突堤のなかほどで2本マスト・3本マストの帆船が毛皮をおろしていたり、もうすこし手前のところではノーバァ・スコシアからきたスクーナー船が薪をなげおろしていることもあるのだが… [HAWTHORNE 1985: 13]。

セイラムの海外貿易の停滞ともなって、東インド海運協会の新規加入会員の数も、確実に減少していった。参考までに数字をあげると、1820年代には110人をかぞえた

新人会員は、30年代になると35人に激減し、40年代では17人、50年代には12人にまでおちこんでいる。それは、さしあたり会の基金の原資となる入会金の減少を意味していた。しかも、博物館の建設に情熱をいただいた創設メンバーは、1850年までにすべてが死亡していた。遺族援助のための出費がかさむなかで、あたらしい会員からは、協会にあくまでも相互扶助組織としての役割の貫徹を期待する声がかまっていたのである。

会員のあいだでは、博物館のコレクションを売却して協会の基金を拡充しようという話題さえ、しだいに、真剣に検討されるまでになっていたのだった。協会は博物館経費の節減のため、1855年をもって、それまで常置されていた博物館責任者の職を一時的に停止した。そして1859年春、当時の協会理事長アレン・パットナムは、ついに、州政府に対して博物館維持のために2万ドルの援助を要請するにいたったのである [WHITEHILL 1959]。

4. エセックス研究所

4.1.

エセックス研究所 Essex Institute は、1848年2月、エセックス郡の住民と自然の歴史に関する資料の収集と保存を目的に創設された民間の研究機関である。エセックス研究所は、創設から8年をへた1856年にいって、ようやく「所報」Proceedings of the Essex Institute (vol. 1-vol. 6, 1856-68) の発行を開始するが、その第1巻第1号の序文は、この研究所の創設経過にふれて、つぎのようになっている [ESSEX INSTITUTE 1856: 1-2]。

エセックス研究所は、エセックス歴史学協会とエセックス郡博物学協会の連合によって創設された。この結果をもたらすべく、1847年の秋、ふたつの協会は数回の会合をもった。組織の基本をなす計画の立案は、合同委員会にゆだねられた。そして、1848年1月14日の会合において、委員会が提案した計画が、両協会によって承認された。

すなわち、この研究所には、エセックス歴史学協会 Essex Historical Society と、エセックス郡博物学協会 Essex County Natural History Society という前身となる組織があり、このふたつの組織が合同して、あたらしい常設の機関を設立したというわけなのであった。それは、歴史学・博物学・園芸学の3部門——のちに歴史学部門から美術部門が独立して合計4部門となる——と、図書室および博物館とから構成されていた。

創設にあたって、同研究所がもうけた3部門——そして、のちに増設された1部門——は、それぞれ、母体となった組織の活動を忠実に継承したものにほかならなかった。すなわち歴史学部門とのちにくわわる美術部門は、もともとエセックス歴史学協会の活動にふくまれていた領域であり、博物学と園芸学は、やはりエセックス郡博物学協会の研究対象とするところであった。

母体のひとつとなったエセックス歴史学協会は、1821年にできている。それは、独立戦争から半世紀をへて、世代の交替がすすむなかで、エセックス地方の住民の歴史に関する史料の収集と保存を目的としていた。協会は、図書・記録・文書・新聞記事の収集にあたったが、同時に、生活用具・武器などの歴史的遺品の蓄積にもつとめていた。さらに、そのコレクションは、しだいに地元知名人の肖像画をはじめとする美術作品にもおよんだ [GOODELL 1871; BELKNAP 1921]。

それらの諸資料は、はじめエセックス・プレースのセイラム銀行の1室——そこはまた、のちにエセックス研究所が仮寓のひとつとするところでもあった——にあずけられ、やがてローレンス・プレースにうつされて、ほとんど未整理のまま、研究所の創設をまつことになる。

おなじく、もうひとつの母体であるエセックス郡博物学協会は、ややおくれて1833年にできた。それは、エセックス地域の自然史に関する図書と標本の収集にあたること为主たる事業であった。歴史学協会は機関誌をもたなかったようだが、博物学協会は1836年より会報として *The Journal of the Essex Natural History* を発行していた [DEXTER 1977, 1980]。また、のちにエセックス研究所が恒例とした野外集会は、この協会の行事を継承したものであった。さらに興味ぶかいのは、この協会が園芸学について関心をもったことで——セイラムは当時、園芸の町としても知られていたという——、発会の翌年から、定期的に季節ごとの花と果実の展示もおこなっていた。この事業もエセックス研究所にひきつがれる。

この協会のコレクションも、最初はエセックス・プレースにあったフランクリン・ビルの1部屋——正式にはセイラム・アシニアム（後述）がかりていたのだが——に保管されたが、その後、マソニック・ホール、チャセイ・ビルほか、セイラム市内を転々としたのであった。その間、協会がマソニック・ホールにあった時代には、日時をかぎって、そのコレクションを一般に公開することもころみていた [FOWLER 1884]。

もともと、歴史学といい博物学といっても、それがエセックス郡を対象とする地域研究であるかぎり、両者のあいだに明瞭な一線が画せるわけではなかった。事実、歴

史学協会は、自然史や地理も視野にいれた活動をしており、それには博物学協会のメンバーも協力するところがあったのである。当時、セイラムきっての知識人であったヘンリー・ウィートランド博士——彼はのちにエセックス研究所の理事長になる（後述）——が、両協会の要職をかねていたのは、その端的な例であった。

要するに、このふたつの地域的な民間団体の活動は、たがいに密接な関係にあったのである。してみれば、ふたつの組織が、それぞれ別々の事業をおこなっていることはなく、いっそのこと合同して、より効果的な活動に転じるべきである——という意見がたかまるのは、いわば時間の問題であったといえよう。そして、もし合同が実現するのならば、そのコレクションを公開するための図書館・博物館を設置しようとかんがえるのも、また、当然のうごきであったといえよう。その仲介の労をとったのは、ウィートランド博士であった。

これらふたつの協会は、エセックス研究所の発足にともない、従来のコレクションのすべてを、あたらしい研究所に移管した。しかし、それで解散したわけではなく、その後も組織をのこし、研究所の運営を支援する体制をとった。たとえば、歴史学協会の収入は歴史学部門の運営に、博物学協会の収入は博物学部門と園芸学部門の運営にあてる——といった具合であった。

また、エセックス研究所は、「所報」のほかに、やがてふたつの出版物、すなわち『ヒストリカル・コレクション』Essex Institute Historical Collections (vol. 1-, 1859-)と『コミュニケーション』Communication (1848-70)をもったが、それらは、それぞれ歴史学部門・博物学部門の研究紀要であったとともに、事実上、歴史学協会・博物学協会の研究報告書としての性格をかねていたのである。ここに掲載された論文のなかには、「これは何月何日の歴史学協会（もしくは博物学協会）の集会でよまれた」といった注記をそえるものがすくなくない。

4. 2.

もっとも、このあたらしい研究所が、創設の当初から所期の目的にかなった活動をおこなっていたのかどうか、ひるがえって、いささかの疑問を禁じえないところである。

すでにふれたように、この研究所が最初の「所報」を発行するのは、創設から数年をへたのちであった。その第1巻の表紙には“1848 to 1856”と記されている。しかし、すこしくわしく内容を点検すると、1848年の活動についてはまったく記載がみられず、49年になってようやく3回の野外集会の記事がのり、50年は2回、51年は1回

の会合が記録されているにすぎないのである。後述のように、各種の会合は、エセックス研究所の活動を特徴づけるものであったが、この記載をみるかぎり、活動らしい活動は、ほとんどなされていなかったようにおもわれる。

これには、むろん、創設当初にありがちな記録の散逸といった事情を考慮にいれてもなお、ありていは、いまだ合同の実が充分にあがっていなかったのではないか——という印象をぬぐいがたいのである。

研究所の「所報」の第1巻がでるのが1856年であったこと（『コミュニケーション』の1848—56年は、それに合冊）、『ヒストリカル・コレクション』の発行が1859年であったこと、そしてつぎののべるように、博物館の実態が整備されるのが1857年であったことなどを勘案すれば、エセックス研究所の実質的な活動が軌道にのるのは、50年代の後半以降とみてよいのではなからうか。

すなわち、1857年、エセックス研究所は、あたらしくエセックス・ストリートに建設されたプルマー・ホールに本拠をすえ、その1階を博物館にした。いま、博物館ということでは、エセックス研究所のそれは、セイラムにとって、1825年に公開された東インド海運協会の博物館につぐ、二番目の施設であった。筆者は、この博物館の開館をもって、エセックス研究所は実質的な活動を開始したとみるのである。

では、これ以前、創設このかた、この研究所は、どこに、どのような施設をもっていたのであろうか。この点について、のこされた資料 [ESSEX INSTITUTE 1865; OSGOOD and BATCHELDER 1879] および「所報」の記載は、はなはだ要領をえないものである。

つたえられるところによれば、最初、エセックス・プレースにあったユニオン・マリン保険会社が使用していた建物を借用し、のちにピックマン・プレースのセイラム銀行の1室——それはエセックス研究所は、先述のエセックス歴史学協会が図書館につかったことのある建物でもあった——に移転し、さらにローレンス・プレースにうつったということになっているが、それぞれの時期や期間の詳細は、かならずしも分明でない。

要するに、エセックス研究所は、組織としては1848年に創設されたものの、それまでの歴史学協会と博物学協会がそうであったように、当初はさだまった施設にめぐまれず、つぎつぎと転居をかさねた末、この1857年になって、ようやく所をえたというわけであった。

もっとも、Institute という言葉を文字どおりに研究所と理解し、ただちに固有の建築物をもった機関を連想する我々が、早計というべきなのかもしれない。アメリカ

における Society, Institute, Institution は、実態において区別しがたい場合が、おいからである。

ところで、1857年に設置されたエセックス研究所の博物館は、セイラム・アシニアムという、これまた民間の図書館との提携によって、ようやく実現したものであった。研究所が博物館として利用することになったプルマー・ホールは、そのセイラム・アシニアムから提供された建物にはかならなかったからである。

セイラム・アシニアムは、1810年にできた会員制の私設図書館であった。それは、それまでセイラムにあったふたつの図書館——ソーシャル・ライブラリーとフィロソフィカル・ライブラリーを合併吸収するかたちで創設された。基金はすべて、維持会員からの拠出によった。創設時のメンバーは82名で、それぞれ100ドルの資金を分担したという [ASHTON 1917]。

もっとも、この私設の図書館もまた、おさだまりのとおりであって、ながく独自の建物をもっていなかった。最初は、マーケット・ストリート（現在のセントラル・ストリート）のセントラル・ビルに2部屋をかりて、2700冊を公開したものの、その後、図書増加とともに、その蔵書をかかえて市内のビルを転々としたのは、先の諸団体の場合とまったく同様である。

ところが、1854年にいって、セイラム・アシニアムは、ミス・キャロリン・プルマーという人物から3万ドルという巨額の寄附をえた。それをもとに、アシニアムは常設の図書館の建設がはじめて可能になったのである。1855年に土地がきまり、1856年に工事がはじまって、翌年には竣工をみることになる。その建物は、基金の寄贈者の名をとって、プルマー・ホールとよばれたのである。

ところが、アシニアムはあたらしいホールを独占しようとはしなかった。おなじ市民的組織であり、やはり恒常的な施設をもたないで困難をかこつエセックス研究所に対し、あたらしく計画されている建物の共同利用を提案したのである。この提案がなされるには、寄贈者であるミス・プルマーの意志がはたらいっていたものとおもわれる。彼女は、彼女が寄贈したアシニアムの建物が、ひろくセイラム市民の科学と教養の向上に役だつ集会場となることを希望していたからである。

この件に関するアシニアムからエセックス研究所への最初の提案は、建設に先だって、はやくも、1854年初夏におこなわれた [ESSEX INSTITUTE 1856: 80]。エセックス研究所はおおむねにおいてその提案をうけいれ、建物の完成する1857年春、両者は最終的な合意に達した。

「所報」に記録されたところによれば、そのとりきめは、おおよそ以下のような内

容からなっていた [ESSEX INSTITUTE 1857: 139]。

セイラム・アシニアムは、

- (1) プルマー・ホールの一階をエセックス研究所が使用すること。
- (2) アシニアムは2階をしめるが、エセックス研究所に必要な応じて2階のすべての部屋を使用する特典をあたえること。
- (3) アシニアムの図書をエセックス研究所の会員が利用すること。

—をみとめる。

エセックス研究所は、

- (1) アシニアムに対して年間300ドルの使用料をはらうこと。
- (2) アシニアムの維持会員が、エセックス研究所の図書を利用すること。
- (3) 光熱費・維持費の半額を負担すること。
- (4) この合意を解消するためには2年前に予告すること。

—を了解する。

こうして、セイラムにおける民間の文化施設ふたつの提携がなったのである。

4. 3.

エセックス研究所は、その母体となったふたつの市民団体から、民間の学問とでもいべきものの伝統をひきついだ。

そのひとつは、このエセックス研究所がメンバー制の研究機関であったということである。研究所を構成するのはメンバー（会員）なのである。日本でいえば、さしずめ学会の会員にあたるものだとして了解しておけばよい。そしてその学会が、常設の研究所を開設したというわけである。

したがって、エセックス研究所の規約・内規などの諸規則は、すべてメンバーに関する事項からはじまっていた [ESSEX INSTITUTE 1856: 3-10]。それらによると、研究所のメンバーとなるには、メンバーの推薦のもと、会議による承認を必要とした。また研究所の役職につけるのはメンバーだけであり、それも総会の場での出席者の投票によって選出されることになっていた。

財源も当然、メンバーの負担によった。メンバーは、毎年、年会費をはらわねばならなかったし、通常の会費以外にも、随時、寄附をもとめられることがあった。ややのちのものであるが、1889年に発行された『職員およびメンバー名簿』の見返には、メンバーが研究所に寄附をする際の書式が印刷されているのをみいだすことができる [ESSEX INSTITUTE 1889]。

研究所のもよおす各種の集会は、おのずから、この研究所の活動を特色づけるものであった。5月には年次総会がひらかれ、1年間の活動や会計が報告された。夏季には、フィールドへでて野外集会在数回おこなわれるのが、通例であった。それ以外の時期には、定期的に例会が開催されていた。野外集會や例会では、何人かの報告者が研究を発表し、参加者から関連する発言がつづくのがつねであった。

ここでは一例として、1864年8月10日にグースターでひらかれた野外集會の様子を紹介しておこう [ESSEX INSTITUTE 1866: 50-54]。このときの参加者は300人であった。セイラムから一番列車にのってグースターについた一行は、タウン・ホールに案内され、地元のメンバーの挨拶をうける。そこで解散して、それぞれの興味にもとづき、海岸や森を散策し、動物や植物の観察や採集にあたる。午後は、タウン・ホールにもどって会合をもつ。前回の集會の記録の朗読、キャビネットや図書室への寄贈の報告、手紙の披露など、かたどおりの議事がおわると、研究会である。

まず、セイラムのヒベンがグースターの初期の歴史について、簡単な説明をおこなう。つづいて、ゲストとして参加したポートランド博物学協会のボウルズが、同伴した同協会のエドワード・モースを紹介する。グースターの J. バンバーがグースター協会についてのべる。そのあと10人以上のメンバーがつぎつぎと午前中の現地調査の成果を報告する。セイラムのпатナムは、その日採集したロブスターについてのべ、おなじくセイラムのクロウバイは岩場で発見した若干の鉱物について報告し、ボストンのマーコウは薬用植物の説明をする——といった具合であった。モースも午前中に採集した Terrestrial Mollusca (陸棲軟体動物) のリストを提出して議論にくわかった。ちなみに、モースがエセックス研究所の集會に顔をだしたのは、おそらく、このときが最初であり、彼は、この直後、エセックス研究所のメンバーにえらばれる。

これら研究所の主催する集會・會議は、すべてメンバーに公開され、メンバーが会員以外の知人を同伴することも許されていた。むろん、これらの集會において、メンバー自身が研究報告をおこなう権利と義務を有した。その報告要旨と討論の記録は、かなり詳細に「所報」に収録され、ひろく会員のしるところとなった。また、すぐれた報告とみなされたものは、編集委員会に推薦され、フル・ペーパーが「所報」など研究所の定期刊行物に掲載されるのが原則となっていた。したがって、今日、のこされた「所報」をくると、当時のエセックス研究所の活動と研究内容を手にとるようにすることができるのであるが、その詳細な検討は、本稿の域をこえる。

なお、エセックス研究所がいわゆる会員制の研究機関であったことが、やがてジョージ・ピーボディーから寄附金をうけたとき、その処置をめぐる、おおきな問題を

生じる要因になることを、あらかじめ指摘しておきたい。

4. 4.

1853年の年次会議で報告されたメンバー数——それは、現在確認できるもっとも初期の数字なのであるが——は、すでに161名をかぞえていた。そして翌年には200人をうわまわり、1856年には300人をこえ、さらに博物館を開設する1860年前後になると、400人にも達していた。ひとくちに400人というが、これが、1世紀以上前のアメリカの地方都市における組織の会員数であることを考慮するならば、その数字は十分に評価するにたるといえよう。

どのような人々が、そのメンバーを構成していたのかを直接しめす資料はない。ただ、メンバーの死亡は、そのつど、集会で報告され、「所報」にその略歴が掲載されるのが慣例となっていたから、我々はそれを通じて、メンバー構成の大略をすることができるのである。それによれば、大学出身者で医師・教師・法律家などの知的な職業に従事する人物がふくまれているのは当然として、それ以外にも、船長・商人・郵便局長・貿易家など、今日の通念ではかならずしも知識人とはいえない一般の市民が参加していた事実をうかがうことができる。

民間の学問の伝統というとき、第二に、この点を指摘しておくべきであろうとおもう。

あわせて注意されるのは、これといった職業の明記されていない大量のメンバーの存在である。これらは記入もれではあるまい。むしろ筆者には、職業をもって規定できない人々の群——セイラムにおける知的有閑階層ともいうべきものの存在を示唆しているようにおもわれる。また肩書があきらかにされている場合でも、医師といい、法律家といっても、ドクター・ウィートランドにその典型をみるごとく、実は開業していない人物がおおいのであって、エセックス研究所の活動は、おもに、これらの人々に基礎をおいていたのであった。

エセックス研究所の活動にみえる市民性は、東インド海運協会の活動とも、あるいはセイラム・アシニアムの活動とも、あい通じるものがあった。

これらの歴史をふりかえてみると、そこには、まだ大学を中心にしたアカデミズムが確立する以前の、いかえれば大学のみが学問の場でなく、市民も学術に荷担する時代の雰囲気をおもわれる。一介の船のりが海洋の情報を収集するかとおもえば、はたまた博物館の建設を夢みる。商人が博物の収集をおこなって、それが十分に学問的成果となる。客観的にみれば、そういう時代はようやく過渡期をむか

えつつあったというべきなのであるが、その余韻は、なおこの時期のセイラムに濃厚にただよっていた。そして、大学に所属せず、さりとて家業にいそむわけでもない、市井の学者が存在しえたのである。

こうした知的な雰囲気は、エセックス研究所をうみ、東インド海運協会の事業をささえ、セイラム・アシニアムの活動を可能にしてきたのである。それは、セイラム市民の文化的伝統といってもよかった。アガシーのもとをさった5人の若者がセイラムにあつまってきたのも、この町の伝統と無関係ではなかったはずである。

しかし、不幸なことに、19世紀後半をむかえたセイラムの市民には、すでに、その伝統を維持するだけの経済力が、決定的に不足していた。その不足を、セイラムの隣町にうまれたひとりの富豪がおぎなうことになったのである。

1916年、盟友パットナムの死に際して、モースがつづった文章に、その間の経緯が簡潔にしめされていた。

その当時、(エセックス-筆者註) 研究所はお金を必要としていた。基金がなかった。やすい会費の、かぎられた数のメンバーが、献身的な少数のメンバーにおもい負担をかけていた。

(中略) ロンドンのジョージ・ピーボディーが本国にかえり、ケンブリッジ(ハーバード大学-筆者註)やニュー・ヘブン(エール大学-筆者註)に博物館を建設するために、高額の寄附をおこなっていた。我々が、エセックス郡の男、ピーボディー氏を、我々の経済的援助を申請することのできる相手のひとりとみなしたのは、しごく当然のなりゆきであった[MORSE 1916: 194]。

5. ジョージ・ピーボディー

5.1.

ジョージ・ピーボディーは、よく、19世紀のアメリカのロマンを体現した人物であったといわれる。その生涯は、いかにも、立志伝をそのままにいく感があり、さらに一生独身をとおし、またその生活のつつまじさが、当時のアメリカ人の共感をさそったからである。

フランクリン・パーカーによるジョージ・ピーボディーの伝記 [PARKER 1971] に序文をよせたメール・カルテは、それを、つぎのようにかきおこしている。

ジョージ・ピーボディーは、自分自身の努力と才能とによって、多大な富をきざぎあげ、人なみはずれた名声をかちえた、19世紀における数すくないアメリカ人のひとりであった。門閥にも、正規の教育にもめぐまれなかったにもかかわらず、彼は、ボルチモアの銀行家として、またロンドンの金融業者として、成功をおさめたのであった [CURTI 1971: ix]。

ジョージ・ピーボディーは、1795年2月18日に、アメリカ合衆国マサチューセッツ州エセックス郡デンバーのサウス・パリッシュという町——当時は、まだ村とよぶのがふさわしかったかもしれない——に、名もない靴屋の息子として、うまれた。そして彼は、長じてイギリスにわたり、やがて世界的に銀行家として、あるいは慈善家として名をなした。

彼の生地は、セイラムの中心から5マイルとはなれていない。この町は、1855年にデンバーから分離してサウス・デンバーとなり、やがて、その町がうんだ偉大な人物をたたえて、1868年、町の名をピーボディーとあらためた。功なり名をとげた彼が、イギリスのロンドンに没したのは、その翌年、1869年の11月4日であった。

つぎに、これまでの伝記的研究 [PARKER 1971; HIDY 1978; CURRY 1898] の記載を参照し、その生涯の事跡を年譜風にとりまとめて、ひとあたりピーボディーのあゆんだ一生を概観しておく。

- 1795年2月18日 デンバーのサウス・パリッシュにうまれた。
父はトーマス（靴など皮革をあつかう職人）、母はジュディス。
8人兄弟の3番目の子供であった。
- 1803年（8歳） 村の学校にかよった。（～1807年）
- 1807年（12歳） はたらきはじめた。
はじめはデンバーで、やがてバーモント州の農村で、そしてニュー・ベリーポート（マサチューセッツ州）では兄デビットの店を手伝った。
- 1811年（16歳） 父をうしなった。
その後は、彼が母や兄弟の面倒をみることになった。
- 1812年（17歳） ジョージタウン（ワシントン・D・C）へでて、はじめて自力で事業をおこした。
- 1815年（20歳） エリサ・リッジと提携して、リッジ・ピーボディー・カンパニーをおこした。（～1829年）
この商社は、主として輸入した乾物の販売に従事した。
- 1816年（21歳） ボルティモア（メリーランド州）にうつり、リッジとの事業を發展させた。
- 1822年（27歳） この年までに、ニュー・ヨーク、フィラデルフィアに支店をだした。
- 1827年（32歳） はじめて、イギリスにわたった。
このとき、彼にはすくなくとも8万5000ドルの財産があった。

- その後、イギリスに定住する1837年までに、都合5回、ヨーロッパとアメリカを往復した。
- 1837年（42歳） イギリスに永住をはじめた。
- 1840年（45歳） この前後、チェサピーク・オハイオ運河、ボルティモア・オハイオ鉄道の経営に関係した。
- 1843年（48歳） ジョージ・ピーボディー・カンパニーをおこした。（～1861年）これより銀行家ないし金融業者として、引退する1864年までのあいだ、主として外国為替および証券の取引によって、財産をたくわえた。
- 1852年（57歳） ピーボディーの寄附により、故郷のデンバーにピーボディー研究所が創設された。
これを機に、母国アメリカの教育・学術・文化事業へのおびただしい寄附が開始された。
- 1854年（59歳） ボストンの実業家モーガンと提携した。
- 1856年（61歳） 約20年ぶりに、アメリカを訪問し、翌年、イギリスにもどった。
- 1857年（62歳） ピーボディーの寄附により、ボルティモア・ピーボディー研究所の創設がきまった。
- 1862年（67歳） ロンドンのまづしい人々に住宅を提供するために、ピーボディーの寄附により、ピーボディー基金が創設された。
- 1864年（69歳） 引退した。
- 1866年（71歳） アメリカを訪問し、翌年、イギリスにもどった。
- 1867年（72歳） ピーボディーの寄附により、ピーボディー教育基金がアメリカに創設された。
- 1869年（74歳） アメリカを訪問した。これが、生前における最後の帰国となった。
- 1869年11月4日 ロンドンで没した。遺体は、アメリカにおくられ、セイラムに埋葬された。

5. 2.

彼の人生をいろいろどったのは、事業家としての立身譚ばかりではなかった。上記の年譜にかきこむには、あまりに繁雑になるので大部分を省略したが、彼が後半生においておこなった、多方面にわたる、しかも膨大な額にのぼる寄附——それは彼のたくわえた財産の3分の2にあたったといわれる——こそが、慈善家ジョージ・ピーボディーの名を不朽のものとしたのであった。

これまで、ジョージ・ピーボディーの伝記をあらわした何人かの人が出たが、彼らはいずれも、ピーボディーの銀行家・事業家としての成功をたたえとともに、いや、それにもまして、慈善家としての彼の業績に紙数をついやしている。ことほどさように、その寄附による社会への貢献がおおきかったのであり、また彼の慈善家としての側面が、アメリカのロマンを体現した人物に、いかにも、につかわしかったからにはかならない。

いくつかの事実は、ピーボディーの慈善家としての活動をわすれがたいものになっている。しかも他の寄贈者とちがって、彼に宗教的な動機があったようにもみえない [CURTI 1971:x]。

ピーボディーがおこなったおびただしい額の寄附と、それを基礎としておこされた数おおくの施設ないし事業について、いまここで、逐一を検討する余裕がない。そこでそれらを、パーカーによる試算 [PARKER 1971: 208-210] を参考にして、あらためて年次順に整理してみると、つぎにかかげるような結果をうる。

なお、パーカーによれば、この数字はかならずしも完全ではないという。なぜならば、我々が確認できるのは、公式の寄附にかぎられており、書籍の購入費、代理人の手数料、郵便代など寄附に付随する諸経費とともに、当然のことながら、匿名の寄附は、ここにふくまれていないからである。実際の寄附は、以下の数字をかなりうまわるものとみなくてはならないであろう。

1837	メリーランド州政府	60,000
1851	メリーランド研究所 (Baltimore, MD)	1,000
1852	ピーボディー研究所 (Peabody, MA)	217,600
1852	第二次グリネル探検隊	10,000
1854	ピーボディー・ハイ・スクール (Peabody, MA)	2,600
1854	ワシントン記念塔 (Washington, D. C.)	1,000
1856	ピーボディー研究所 (Danvers, MA)	100,000
1857	ピーボディー研究所 (Baltimore, MD)	1,400,000
1862	ピーボディー基金 (London)	2,500,000
1864	アメリカ合衆国衛生局	10,000
1866	ピーボディー博物館 (Harvard Univ., MA)	150,000
1866	ピーボディー博物館 (Yale Univ., CO)	150,000
1866	メモリアル教会 (Georgetown, D.C.)	70,000
1866	ピーボディー研究所 (Georgetown, MA)	30,000
1866	フィリップス・アカデミー (Andover, MA)	25,000
1866	ケニオン・カレッジ (Gambier, OH)	25,000
1866	メリーランド歴史学協会 (Baltimore, MD)	20,000
1866	ピーボディー図書館 (Thetford, VT)	10,000
1867	ピーボディー教育基金	2,000,000

1867	ピーボディー科学アカデミー (Salem, MA)	140,000
1867	マサチューセッツ歴史学協会 (Boston, MA)	20,000
1867	サン・スピリト病院 (Rome, Italy)	19,300
1867	ピーボディー図書館 (Georgetown, D.C.)	15,000
1867	ピーボディー図書館 (Newburyport, MA)	15,000
1867	ホルトン・ハイ・スクール (Danvers, MA)	2,000
1869	ワシントン・リー大学 (Lexington, VA)	60,000
	その他 (1000ドルにみまない寄附)	2,475
	総額	7,055,975

ピーボディーの慈善事業としては、ロンドンの窮民救済住宅基金のための寄附が有名であるが、これをみれば、ピーボディーの多方面かつ多額におよぶ寄附の、その大半が、母国アメリカにおける公共図書館・研究所・学術調査・博物館・学校など、総じて学問・教育への援助にむけられていることが、了解されるはずである。あらためて数字をあげると、現在、判明している彼の寄附総額700万ドル余の内、上記の目的に提供された分は、440万ドルにのぼり（「その他」に計算したものをふくむ）、また高額寄附の上位みっつのうちのふたつを当該分野がしめているのである。

正規の教育をうける機会のとほしかった彼は、晩年、とりわけ社会教育もしくは生涯教育事業の振興に熱心であった——といわれている。たしかに、上掲の表にあらわれた顕著な傾向は、彼の関心がそのような方面にそそがれていた事実をものがたる。彼の慈善家としての活動は、南北戦争という混乱を体験した19世紀後半のアメリカにあって、学術・教育施設の充実に無視できない役割をはたしていたものとおもわれる。

しかも、ピーボディーの寄附は、無責任なお金のばらまきではなかった。彼は、まとまった額の寄附をおこなう場合には、かならず信頼するにたる、複数の委託人をさだめた。そのうえで、彼ら委託人に対し、寄附金運用について詳細な指示をあたえ、寄附の効果が最大限に発揮されるように細心の注意をはらうのがつねであった。このような寄附のありかたは、彼の寄附それ自体が、事業家としてのピーボディーにとって、もうひとつの事業ともいうべきものであったようにみえるのである。

額にすれば、数おおい彼の寄附のなかで、かならずしも特筆するほどのおおきではなかったにせよ、ピーボディー科学アカデミー設立の基金となった寄附も、また、その例にもれなかった。

5.3.

そのジョージ・ピーボディーは、1865年——おそらくその夏——ロンドンで、セイ

ラムからやってきたフランシス・ピーボディーと会見したはずである。フランシス・ピーボディーは、ジョージ・ピーボディーのまた従兄弟にあたる人物である。しかも、当時、彼はエセックス研究所の会長という要職にあった。

ふたりの会見は、エセックス研究所のウィートランド博士の要請によるものであったという。博士は、その年から同研究所の会計と書記をかねることになったばかりであった。彼は、ヨーロッパにいく会長フランシス・ピーボディーに、ひとつの任務を託した。それは、ほかでもなく、ジョージ・ピーボディーにエセックス研究所を援助するための寄附をもうしこむことであった。

このとき、ジョージ・ピーボディーは、慎重に確答をさけた。なにせ、ロンドンの彼のもとへは、かぞえきれないほどの寄附申請がおしよせていたのであったから、たとえちかしい縁者からの依頼とはいえ、回答を保留したのは当然であった。ただ、ジョージ・ピーボディーは、つぎの年にアメリカへいく予定があるので、この件については、その際に、あらためて考慮することだけは約束してくれた [WHITEHILL 1949: 55-56]。

ジョージ・ピーボディーは、予定どおり、翌1866年5月に渡米し、まる1年にわたってアメリカに滞在した。前掲の寄附一覧をみてもわかるように、1866年から67年にかけては、彼の寄附が集中的におこなわれた時期にあたっている。それは、おのずと、彼の今回の滞米の目的をものがるものであった。そしてその間に、ジョージ・ピーボディーは、セイラムをたずねる機会をもったようである。

東インド海運協会とピーボディー博物館の歴史について簡潔な書物をあらわしたウォーター・W・ホワイトヒルは、

ジョージ・ピーボディーがセイラムを訪問したとき、彼は、エセックス研究所に好意をおぼえた。そこで、エセックス研究所の事業の発展のために、お金をおくることを決意した [WHITEHILL 1949: 56]。

とかいている。そしてただちにコルネル・フランシス・ピーボディーをはじめとする委託人5人——のちにウィートランド博士ら4人がくわえられて9人となる——を任命したという。この委託人は、寄附が実施されたのち、その管理と運営にあたるべきメンバーであった。

おそらく、この記述はただしいであろう。ジョージ・ピーボディーは、1867年4月末——それは彼がイギリスへもどる直前だった——に、ニュー・ジャージー州のニュー・アーク・ジャーナル紙の記者のインタビューにこたえて、「こちらにくるまえ、ロンドンで計画していたことのすべてを、ほとんど変更なく（このアメリカ滞在中に

—筆者註) 実行したよ。ただしエセックス郡の科学のための贈物は予定外だったがね」
とはなしたのである [PARKER 1971: 165, 200]。

この発言は、この寄附が、かねてから予定されていたものではなく、現地をおとずれた——そしてとりわけエセックス研究所からうけた——感動によって決意されたものであることを示唆している。

ただし、ピーボディーのセイラム訪問がいつのことなのか、そして最終的に寄附を決意したのがいつなのか、既存の伝記的研究は、正確な期日をあきらかにしていない。ピーボディーは、1866年5月1日、船でニュー・ヨークにつくと、すぐに、彼の妹がいたマサチューセッツ州のジョージタウンにいき、そこに2カ月ほど滞在して静養した。ジョージタウンとセイラムは、さほどはなれていない。ジョージ・ピーボディーのセイラム訪問は、おそらく彼のジョージタウン滞在中——すなわち1866年5月ないし6月の出来事ではなかったかとかんがえられる。7月以降、彼はニュー・イングランドをはなれて各地を転々としたから、セイラムをおとずれる機会はなかったとみるのが穏当であろう。

このときのことを、ウェイマンは、つぎのようにかいている [ウェイマン 1976a: 257]。

若いフレドリック・プットナム (パットナムのこと—筆者註) は、(中略) エセックス郡地域の著名な家柄の出であったので、彫の深い顔をして質素な様子をした、銀色の髪の老いた独身者 (ジョージ・ピーボディーのこと—筆者註) に会う機会を得た。そしてセイラムの古いエセックス研究所の付近に、新しいダーウィン説派の科学センターを建設するという彼の夢を、熱を込めて述べ立てたのである。

もし、パットナムがジョージ・ピーボディーに接触したのが事実だとすれば、それは、このセイラム訪問の前後、ピーボディーがジョージタウンに滞在していた期間をおいてほかになかった。

しかし、この文章には、すくなくともみつつの点で不審がある。

まず第一に、パットナムが直接ピーボディーと接触し、寄附について折衝したことをしめす根拠がとぼしいことである。たとえ、ピーボディーへの寄附の申請にパットナムの意志がつよく反映していたにもせよ、この間の交渉は、あくまでウィートランド博士が、それも、どちらかといえば、個人的な立場でおこなっていたとみるべきだからである。

第二に、この時点では、まだあたらしい研究所の構想は芽ばえていない。ピーボディーの寄附は、最後の最後まで、エセックス研究所に対してなされるはずだったからである。

第三に、たとえパットナムがジョージ・ピーボディーとあい、寄附を要請したことがあったにせよ、彼がこの段階で、ダーウィン学説に同調していたとはかんがえにくい。セイラム学派がしだいに進化論に傾斜していくのは事実だが、それは、いますこしのちのことであり、しかもパットナムは、それにもっとも慎重な態度をとった人物であった [DEXTER 1979]。

このあたりの事実関係についての理解は、日本の研究者はもとより、アメリカの科学史・伝記の著者においても、結果と発端の倒錯があって、しばしば正確さにかける。しかも、当事者たちの発言までもが、年月をへるにしたがって混乱をきたしてくるので、注意が必要である。

6. 寄附金のゆくえ

6.1.

上にのべたように、のちにピーボディー科学アカデミーに結実することになったジョージ・ピーボディーへの寄附の申請は、もともと、エセックス研究所によってなされたものであった。それは、いくつかの紆余曲折をへて、ピーボディー科学アカデミー創設という結果になったが、本来、ピーボディーからもたらされる寄附は、エセックス研究所の基金を拡充するものとなるはずであった。

ジョージ・ピーボディーから寄附金をひきだすについては、とりわけ、ウィートランド博士の尽力がおおきかったとかんがえられる。先にのべたように、1865年夏、ヨーロッパに旅行するフランシス・ピーボディーに、ロンドンでジョージ・ピーボディーと接触するよう、ひそかに依頼したのも、ウィートランドであった。

もっとも、このウィートランドの水面下のうごきは、むしろ彼の個人的判断にもとづくものというべく、かならずしも組織的なものではなかった。この間の経過は、後年、ウィートランド自身が、私的な回想のなかではじめてあきらかにした事実であって [ROBINSON n.d.]、エセックス研究所の公式記録である「所報」などに、このことは、いっさいふれられていない。計画は、穩密にはこぼれたのである。

おそらくウィートランドには、それを表面化させることによって生じるであろう事態が予測されていたにちがいがなかった。その事態については、あとで、くわしくのべることになる。

いずれにせよ、この時点で、エセックス研究所の現状と将来について真剣におもいをめぐらせていたのは、セイラム知識人を代表するウィートランドと、そしてまだわ

かいパットナムのふたりだけであったにちがいない。パットナムについては、すでにのべるところがあった。したがってここでは、ウィートランドという人物について、ある程度の予備知識をもっておく必要があるだろう。

ヘンリー・ウィートランドは、1821年1月にセイラムで生まれた。父リチャード・ウィートランドは、イギリスからやってきた船長で、東インド海運協会のふるい会員(1800年8月に加入)であった。ウィートランドは、1831年、ハーバード大学を卒業したのち、兄にしたがってイギリスへ航海を経験するが、セイラムへもどってからは、1833年のエセックス郡博物学協会の設立に参画し、また1837年から48年まで、11年間のながきにわたって東インド海運協会博物館責任者の職にあり、さらに1848年のエセックス研究所の創設にも重要な役割を演じた [PUTNAM 1896; UPHAM 1895; ESSEX INSTITUTE 1893]。

この間、ハーバード大学から医学博士の学位をうけたが、生涯、開業することはなかった。学問的な関心は、博物学を中心に多岐にわたり、みづから船をしたてて、大西洋のアザリア諸島や南米のパラグアイにおもむいたこともあった。しかし、学問的な著作はすくなく、学者としての業績よりは、むしろ、セイラムひいてはニュー・イングランドにおける市民的文化事業の組織者・推進者として、おおくの役職を兼務し、すぐれた実務能力を発揮したことが評価される。

1865年5月、ウィートランドは、エセックス研究所の書記兼会計に選出された。エセックス研究所には、その前年、わかいパットナムが博物館責任者として着任しており、研究活動のあらたな発展が期待されていた。しかし、すでにのべたように、エセックス研究所には、それを保証する財源がとぼしかった。研究所運営の事実上の責任者となったウィートランドの最初の仕事は、その基金の確保でなければならなかった。そして彼は、エセックス郡出身の富豪で、いまはロンドンにあるジョージ・ピーボディーに、それをもとめたのである。

6. 2.

そしてその寄附は、おそらく1866年初夏、ジョージ・ピーボディー本人のセイラム訪問によって、ほぼ確実になった。もっとも、エセックス研究所がジョージ・ピーボディーの意向にそうには、いくつかの困難があった。

そもそもエセックス研究所は、セイラム・アシニアムの好意によって、いまだに、アシニアムの保有するプルマー・ホールに間借りする身であった。ところが、ピーボディーは、彼の期待する研究所は、それにふさわしい独自の建物をもつべきである

とかんがえていた。もし、そのために資金が必要なら、それは彼が用意するというのである。したがって、エセックス研究所は、まず、しかるべき建物を物色する必要にせまられた。

ウィートランド博士は、かねてから東インド海運協会が経済的な危機におちいっていることを熟知していた。博士は、かつて11年にわたり、東インド海運協会博物館の責任者をつとめた経歴のもちぬしであった。彼は、1866年の秋から冬にかけて、同協会の有力者に対し、将来もたらされるであろうピーボディーの寄金によって、海運協会の博物館になっているイースト・インディア・マリン・ホールを買収するための下交渉をおこなった。

同年12月14日、東インド海運協会の会議に提出された博士の手紙には、

- (1) エセックス研究所の利益のために、イースト・インディア・マリン・ホールをかいとること、
- (2) 標本資料など同協会が現在ホールに所有するものは、建物の買手に永久に寄託するものとする、
- (3) 研究所が事務のために配備する設備は、東インド海運協会の職員や会員の会合などに使用してよいこと、また、航海記録や協会の書類はエセックス研究所の図書館に帰属するが、それを別置すること、
- (4) 東インド海運協会の現在の会員は、これまで同様、ホールを訪問し友人を招待する権利を保有すること、

——などが、しめされていた [WHITEHILL 1949: 57]。

どちらかといえば、みずからの博物館をもてあまし気味であった協会側に、ことさら異議のあるはずはなかった。数回の会議ののち、12月27日、この提案はそのまま、東インド海運協会の承認するところとなった。

あらためて念をおしておくならば、この段階で、それを買収し、かつ管理するのは、あくまでエセックス研究所であって、あたらしい別の機関ができることは、まったく想定されていないのである。

6.3.

それはともかく、これで当面の難問が解決されたようにみえた。ところが、その一方で、深刻な問題が、ほかならぬエセックス研究所の側に生じていた。

ひとつは、エセックス研究所の改称問題であった。寄附者であるジョージ・ピーボディーとそれをうける会長フランシス・ピーボディーは、ともに、寄附が実行された

時点で、エセックス研究所の名をあらためることをかんがえていたふしがある。ウィートランドも、それに同意していたといわれる。これまでピーボディーの寄附によって創設された機関は、いずれもその寄附者を記念して、彼の名をかぶせた名称を採用していた。今回はあらかじめ創設が意図されていたわけではなかったが、前例にならって既往の名称を変更しようとしたのである。

なお、ジョン・ロビンソンの回想によれば [ROBINSON n.d.]、この時点ですでに〈ピーボディー科学アカデミー〉という名称がかんがえられていたというのが、それを確認するすべをもたない。

いずれにせよ、当然のこととして、エセックス研究所の創設以来、その運営にあたってきた役員のかなに、従来の名称へのつよい愛着がしめされた。しかも、それを単なる感傷といいきれないところに、問題の深刻さがあったのである。——というのも、名称を変更することが、会員制の研究機関であるエセックス研究所の性格の変更につながるのではないかという危惧があったからである。

このおそれが、さらに第二の問題を派生することになる。すなわち、ジョージ・ピーボディーの意志によると、その寄附金の管理と運用は、彼自身の任命した——すなわち、彼の意向を忠実に代行する——委託人によっておこなわれるものでなくてはならなかった。それは、ピーボディーのおこなった寄附の大半にみられる方式であり、ピーボディーの立場からすれば、彼の寄附が当初の目的どおりに効果を発揮するための当然の措置にほかならなかった。

ところが、これまでのエセックス研究所の運営は、すべて会員の合議にもとづいておこなわれてきた。すでに指摘したことであるが、エセックス研究所が会員制の機関であったことを、あらためて想起しておこう。研究所の執行部——役員・職員は、会員の投票によって選出される。選出された役員・職員は、会員の合意にもとづいて、研究所の運営にあたる。この原則にしたがうかぎり、たとえピーボディーからの寄附金といえども、その管理と運用は、すべからず会員の意志を体した執行部にゆだねられるべきであった。

しかし、ピーボディーの意向にしたがうと、彼ら自身の運営機構と、それとは別の原理で選考された委託人とが並立する事態になる。そうなれば、場合によっては、基金をもった委託人の発言力が執行部のそれをうわまわることさえ、十分に予想されるであろう。そのような二重組織の出現に、エセックス研究所のメンバーのおおくが難色をしめしたのも、わからないではない。

ピーボディーへの寄附の依頼が、ウィートランドの個人的、かつ水面下のうごきと

して開始されたのは、あらかじめ彼に、それを公表すれば、かならずや、このような抵抗がおきるといふ予感があったからではなかったかと推察される。ピーボディーの意志がかたまるまでに、エセックス研究所の側に問題が発生すれば、とうてい寄附は実現しないであろう。そこでウィートランドは、それが決定的になるまで、話をふせていたものとおもわれる。

しかし、こうしてピーボディーの寄附は、宙にういた格好になった。

ピーボディーの寄附が既存の組織とのあいだに軋轢を生じたのは、これが最初ではなかった。1866年初夏、ジョージ・ピーボディーは、彼の寄附によってボルティモア（メリーランド州）に創設されようとしているピーボディー研究所と、既存のメリーランド歴史学協会とのあいだの調整に苦心しなくてはならなかった。

寄附に際して記されたピーボディーの手紙には、新研究所の建物に歴史学協会が自由に使用できる場所が確保され、また協会のメンバーが研究所の運営に参画することが保証されていたにもかかわらず、委託人たちと協会側の思惑は、容易に一致をみなかった。そしてついに「一つ屋根の下で二つの組織が共存することは、現実的に困難である」と判断される事態にたちいたった。

結局、ピーボディーは、メリーランド歴史学協会に出版基金という名目で、別に2万ドルの寄附をおこない、新設のピーボディー研究所と既存の協会との縁をきらねばならなかったのである [PARKER 1971: 153-154]。

いま、セイラムにおいても、おなじように既成の組織であるエセックス研究所とあらたに任命された委託人の関係は、微妙であった。そうした状況のもとで、しだいに、エセックス研究所から独立した、しかし相互に密接な関係をもつ別個の研究機関設立の構想が浮上することになる。

6. 4.

そして、ジョージ・ピーボディーが寄附の意志を実行にうつすべく、ふたたびセイラムにやってきたのは、まさしく、その判断の岐路にさしかかった時期であった。

ジョージ・ピーボディーは、1867年2月26日、セイラムにいた。彼はそこで、9人の委託人にあてて手紙をかく。その手紙は、彼一流の、熱っぽい調子につらぬかれていた。それは、

同封の委任状によっておわかりのように、わたしは、エセックス郡の科学と有益な学問を振興するために、合計14万ドルを、貴方がた自身と貴方がたの後継者の手にゆだねたいとおもいます。

——とかきおこされ、

この委託が、われらの、ふるき、よきエセックス郡内にとどまらず、われらのコモンウェルズ（マサチューセッツ州をさす-筆者註）、われらのコモンカントリー（アメリカ合衆国をさす-筆者註）における知性と道徳の発展に寄与することをねがいつつ…。

——とむすばれていたのである。

ちなみに、この「エセックス郡の科学と有益な学問を振興するために」というくだりは、のちのちまで、ピーボディーのこの寄附が話題にされるとき、かならず言及される、絶好のうたい文句となった。

さらにピーボディーは、手紙にそえた委任状の冒頭で、

- (1) 9人を委託人に任命することを確認し、
- (2) それら委託人に対し、「エセックス研究所の名のもとに、いま、セイラム市に創立されようとしている法人」に関して、この委任状の条項を実行するうえで必要、もしくは有効な協議・協定をおこなう、すべての権限をあたえること、

——を表明している。

また、委任状の本文では、

- (3) 14万ドルのうち4万ドルは、東インド海運協会ホール（いわゆるイースト・インディア・マリン・ホール）の購入と改修にあて、のこりの10万ドルは永続資金として保管すること、
- (4) あるいは収入の12分の7は物理学と実用工学の部門の、12分の5は博物学部門にあてるように、
- (5) 委託人の活動を記録にのこすこと、法人化に必要なアクト、運営の規則などを作成すること、

——といった具体的な指示をあたえていた。なお、このピーボディーの手紙と委任状の本文は、[PEABODY ACADEMY OF SCIENCE 1869: 1-4] に収録されている。

9人の委託人の姓名と肩書、そしてジョージ・ピーボディーとの関係は、以下のごとくであった。順序は、ピーボディーが記したとおりである。

フランシス・ピーボディー	エセックス研究所会長（また従兄弟）
アーサー・グレイ	大学教授
ウィリアム・C・エンディコット	
ジョージ・ピーボディー・ラッセル	大学教授（甥）
オスニエル・C・マーシュ	大学教授（甥）

ヘンリー・ウィートランド	エセックス研究所書記・会計
アベナー・C・ゴッドウェル・ジュニア	エセックス研究所
ジェームス・R・ニコルス	エセックス郡ハーバーヒル在住 (ピーボディーの友人)
ヘンリー・C・パーキンス	エセックス郡ニュー・ベリーポート在住 (ピーボディーの友人)

ジョージ・ピーボディーと親戚関係にあるもの3人、エセックス研究所の関係者が3人、セイラム以外から4人(うち2人はエセックス郡北部の住人)といった内訳になっている。ピーボディーの意志をつらぬき、かつ衆知をあつめるには、穏当な配置といえようか。もっとも、かならずしも全員が実際に仕事をしたわけではなかった。ジェームス・R・ニコルスやヘンリー・C・パーキンスなどは、会議にもあまり出席していない。

ところで、この寄附が実行されたとき、現地セイラムで、どこまで懸案事項の調整が進行していたのか、のこされた記録——といっても我々が利用できるのは、公表された公式のものにかぎられるが——からは、いっとうに分明でない。あるいはまた、この段階で、当のピーボディー本人がどの程度までセイラムの複雑な事情をしっていたのかも、よくわからない。

すくなくとも、イースト・インディア・マリン・ホールの購入は可能となっており、それはピーボディーも承知していたはずである。だからこそ、委任状に、その購入のための具体的な指示をあたえたのであった。しかし、エセックス研究所と別個の研究機関をつくるや否やについて、セイラムでどれほど判断がかたまっていたのか、そしてその経過を、ピーボディーがどこまで了解していたかになると、はなはだ微妙であったとしか、いいようがない。

この点をかんがえる手がかりになるのは、委任状のなかにみえる「エセックス研究所の名のもとに(この箇所原文は、“under the name and title of the Essex Institute”である)、いま、セイラム市に創立されようとしている法人」という表現である。問題の焦点は、「いま、セイラム市に創立されようとしている法人」が、具体的になにをさしていたのかであろう。

委任状をよむかぎり、それが従来のエセックス研究所と併存するもの——すなわち別の研究機関であるとは、一言もかかれていないし、それをうかがわせる文言もみいだせない。したがって、「いま、セイラム市に創立されようとしている法人」は、文字どおり、エセックス研究所の名のもとに、その事業を継承・発展させる法人と理解

せざるをえないであろう。

いくつかの解釈のなりたつ余地があろうが、ひとまず私見では、ピーボディーは、エセックス研究所を「改称」することこそ断念したものの、旧来の名称をのこしたうえで、これを、物理学・実用工学などの部門をふくむ、あたらしい大規模な研究機関に「改組」する意志を、なお、すてていなかったのではないかとかんがえる。そしてそう理解するならば、ピーボディーの寄附をめぐる、我々が想像する以上に、エセックス研究所でつよい抵抗が生じたのも、ひとまず納得がいくようにおもわれるのである。

7. ピーボディー科学アカデミー

7.1.

3月26日付でピーボディーからの寄附がとどいたのをうけて、4月2日、9人の委託人は会合をもった。

招集をかけたのは、委託人として筆頭に名前があげられていたフランシス・ピーボディーである。会場は、セイラム・ナショナル銀行の社長室であった。この正式の最初の会議が、プルマー・ホールのエセックス研究所内部ではなく、別の場所でひらかれたという事実は、なにを意味するのであろうか。それは、このときすでに、委託人たちのあいだで、エセックスとは別の機関を設立する構想があたためられていたことを示唆するものであったのかもしれない。

それはともかく、この会合をもって、正式に委託人会議が成立し、会長にフランシス・ピーボディーが任命され、そのほか副会長・書記・会計などの役職が選出され、また財政委員会・実務委員会が組織された。ウィートランドは役員にこそならなかったが、財政・実務の両委員会に席をしめた。この件について、彼が、終始、実務の最前線にいたことが、これでわかる。

また委託人会議は、この会合で、すでに交渉の進行している東インド海運協会のホールおよび同協会の資料を、委託人のもとに移管する手続を開始することを決定した。そして委員会は、9人の連名で、ジョージ・ピーボディーに礼状を発送した。この礼状の文面にも、その寄附をもとに、あたらしい機関が設立されることをうかがわせる部分はみあたらない。

以下、すこしく煩雑になるのを承知のうえで、委託人委員会の議事については同委員会年報 [PEABODY ACADEMY OF SCIENCE 1869] に、またエセックス研究所については同所会議録 [ESSEX INSTITUTE 1866-68] によりながら、事態の推移をおって

みることにしたい。

4月4日、エセックス研究所の定例会議で、ピーボディーからの寄附金が委託人のもとにとどいたことが報告され、席上、先のピーボディーの手紙と委任状、および委託人の礼状が朗読された。そして、博物館責任者であるパットナムと園芸学部門の学芸員ローリングがたって、その寄附を歓迎する旨の発言をした。

とりわけローリングのスピーチは、ジョージ・ピーボディーの履歴からときおこし、これまでの彼のおびただしい慈善事業を紹介しつつ、その人がらを賛美するという大演説であった。しかし、彼はまだ、その寄附がエセックス研究所に対してなされたものとはばかりおもいこんでいたようである。彼の発言のなかには、「ピーボディーの助成金によって、エセックス研究所は我々の国で最高の組織に仲間入りした」とか、「エセックス研究所におきたこの出来事（ピーボディーの寄附をさす-筆者註）に充分な力をあたえるために」といった言葉がちりばめられていた。

パットナムの方は、ごくひかえ目であった。彼は、「彼ら（エセックス研究所のメンバー-筆者註）は、彼らが、寄贈者の目的を達成するために、この基金の委託人に協力する団体としてえらばれたことを、ふかくほこりに感じることでありましょう」としかいっていない。彼の場合、ウィートランドを介して、かなり細部の事情に通じていた可能性がある。

エセックス研究所は、この会議で、パットナムら7人のメンバーからなる特別委員会を発足させることにした。それは、ちかい将来におこされるであろう行動の計画について、寄附金を管理している委託人と協議し、委託人からの提案をうけ、それらを報告することを任務とするものであった。

4月6日、東インド海運協会と委託人とのあいだに最終的な合意文書——その内容は、基本的に前年の年末、1866年12月27日にウィートランドとのあいだで了解されたものとおなじである——が作成された。そして、同日付でイースト・インディア・マリン・ホールとそこに収蔵されている資料のすべてが、委託人の管理下に移行することになる。

つづいて4月13日、委託人は会議をもった。会議は、移管されたイースト・インディア・マリン・ホールおよびその資料の管理には、財政委員会があたること、4月16日より24日まで同ホールを一般に公開し、以後、改装のため閉鎖することをきめた。さらにその席で、ウィートランドら3人からなる小委員会が組織され、この委員がエセックス研究所とのいっさいの連絡・交渉にあたることになった。

エセックス研究所の交渉相手は、パットナムらの特別委員会であったから、ここで

も、ことは、おおむねウィートランドとパットナムの線で進行したとみてさしつかえないのである。

なお、この時点でも委託人たちは、依然として、エセックス研究所とことなる機関について、明言をさけている。むしろ、<ピーボディー科学アカデミー>という呼称も、いっさいもちいられていない。ただ、委託人会議の小委員会のその後のうごきから察するに、この小委員会の設置が、エセックス研究所から、その博物学資料を移管するためのものであったことは、疑問の余地がない。

——であったとすれば、我々は、ようやくこの段階にいたって、委託人が新研究機関設立の具体的な行動にうつっていたことを確認してよいようにおもわれる。

7.2.

4月16日、さらに委託人は会合をかさねた。

この会合で、彼らは、はじめて「博物館」という言葉をつかった。そして、その「博物館」の管理責任者および職員の選考にあたるため、ウィートランドらによる人事委員会が組織された。彼らは、独自に人事を開始したのであった。ここに、委託人がエセックス研究所と別個の機関、すなわち「博物館」をつくらうとしていた意志が、ようやく、よみとれるのである。それは、まだ名前がなく、しばらくのあいだ、かりに「委託人の博物館」とよばれることになる。

5月1日、ジョージ・ピーボディーは、ニュー・ヨークから船にのって、ヨーロッパへの帰途についた。その直前、4月29日、30日付のニュー・アーク・ジャーナルの紙上に、ピーボディーと記者の会見記事がのった（前述）。そのなかで、ピーボディーは、この寄附にふれ「エセックス郡の科学のための贈物」といういいまわしをした。委任状にエセックス研究所の名を明示したのにくらべれば、表現はより抽象的になっている。ピーボディーも、事態を了解したようであった。

5月16日の委託人の会議において、人事委員会が5月1日付で「委託人の博物館」の責任者に、そのときエセックス研究所博物館の管理責任者の職にあったフレドリック・パットナムをあてることを決定し、そのパットナムが、必要に応じて助手を雇用することをみとめた旨の報告がなされた。そしてこの日付で、おなじくエセックス研究所博物学部門の学芸員 A・ハイアット、E・S・モース、A・S・バックカード・ジュニア、ケールブ・クックが「委託人の博物館」の助手に採用された。

かくしてセイラム学派の5人は、そろって、「委託人の博物館」の創設に参加することになった。あわせて、これまで四半世紀以上にわたって東インド海運協会博物館

の職員であった T・ソウルと J・ハモンドが、従来どおり博物館の業務に従事することになった。ただし、彼らの所属はあくまでも東インド海運協会であって、「委託人の博物館」の職員ではなかった。

この人事の意味するところは重要である。ひとつは、この人事を通じて、「委託人の博物館」とエセックス研究所は、緊密な連携をたもつことに成功したということである。——というのも、彼ら5人は新博物館に席をえ、そこから給料をはらわれながら、以後数年にわたって、彼らのエセックス研究所におけるその地位に、おおきな変動がなかったからである。

すなわち、パットナムは1870年度までエセックス研究所の博物館管理責任者の職にとどまり、以後は副会長に昇格した。その間、パッカードはエセックス研究所の客員幹事になり、のこりの3人も、おなじく1870年度まで、年によって多少の出入はあるものの、その学芸員の地位に大勢として変化がなかった。要するに、エセックス研究所と新博物館を構成する人材は、その一部の、しかもそのもっとも活動的な部分で、完全に重複していたのである。

我々は、この人事から、委託人が別の機関の創設にふみきった真意をうかがうことができる。彼らは、エセックス研究所に対立する施設を構想していたわけではなかったのである。委託人は苦慮のすえ、エセックス研究所の主体性とジョージ・ピーボディーの意向との、双方が抵触せず、しかも、寄附金がもっとも有効にはたらきうる形態として、あたらしい博物館をかんがえだしたのであった。

にもかかわらず、その一方で、いわゆるセイラム学派の青年たちが、ここにその拠点をえることができたという事実のおもみも、無視しがたいものがあつた。彼らの学派の同人誌ともいふべき『アメリカン・ナチュラリスト』の発行も、やがてエセックス研究所から新博物館にうつることになる。それは、彼らの主たる活動が、エセックス研究所からあたらしい機関に移行したことの、端的なあらわれにはかならなかつた。彼らは、既存の研究機関の制約にわずらわされることなく、自由で奔放な活動の場を保証されることになったのである。

しかも彼らは、以下にのべるような経過をへて、彼らの研究の材料となる博物学関係の資料の一切を、エセックス研究所から、あたらしい機関に移動させてしまったのである。

7.3.

5月21日、委託人会議の小委員会は、エセックス研究所に対して——より正確には、

その特別交渉委員会の代表であるパットナムにあてた手紙のかたちで——、重要な提案をおこなった。その主旨は、「エセックス研究所の博物学資料コレクションを永久に委託人に寄託する」というものであった。

この提案には、

- (1) 委託人は、エセックス研究所の博物学にかかわるコレクションと資料を、特別かつ恒久的な寄託としてうけとること、
- (2) それらをイースト・インディア・マリン・ホールに移動させ、そこに保管すること、もっとも、場合によっては、それと同条件の場所(ただしセイラム市内)にうつすこともありえること、
- (3) それらは、研究所からの委託品として整理・表示され、また委託人に寄託された他の類似の性格のコレクションとおなじ管理と注意のもとにおかれること、
- (4) エセックス研究所のメンバーが、それらをこれまでどおり研究・実験などに利用することをさまたげないこと、
- (5) 移管と整理にかかわるすべての費用は委託人が負担すること、またエセックス研究所にある保管棚・展示ケースなどを委託人がかいとること、

——などの条項がふくまれていた。

手紙はまた、この移管が、「委託人と研究所の将来の協調」にとってもっともこのましいものであることを強調し、さらにそれが「研究所の地位、そのメンバーの熱意と活動、ジョージ・ピーボディーの多額の寄附からして、この地方の名誉となり、その住民の利益の源泉となるであろう」ともかかっている。

そして手紙は、「委託人は、エセックス研究所がこれまで達成してきたおおくの成果をさらに発展させることによって、委託の偉大な目的を実現させるために、エセックス研究所のメンバーの格別の御協力をいただくことをねがわしくおもいます。そして、あなたがたが、この提案に同意されることを希望するものであります」とむすばれていた。

公式の記録のみをおってきたものには、いささか唐突の感をいなめない内容であるが、手紙のなかには、「さる金曜日の充分かつ率直な討議のあと」「これらのすべては、我々とあなたがたとの交渉の場で説明されています」といった表現をみることができから、この提案がなされる以前に、いくたびかの折衝がくりかえされていたことがわかる。したがって、この手紙は、すでに双方が一定の同意に達した段階で、それを確認するための文書として、あるいはエセックス研究所の総会を予想して記されたものとかんがえられる。

この手紙をうけとったエセックス研究所は、おなじ5月21日付で、きたる24日にエセックス研究所の特別総会を開催する公示をおこなった。その公示には、いうまでもなく、「研究所の科学分野のコレクションを東インド海運協会ホールに移管させることについての議決」という議題が明示されていた。

5月24日、エセックス研究所は、公示どおりに特別総会をひらいた。その席上、ピーボディ寄金の委託人との交渉にあたってきた特別委員会は、上記の手紙をそのまま委員会の交渉の経過報告として提出し、総会の承認をもとめたのである。その報告は、さしたる抵抗もなく総会の同意をえた。すでに根まわしは、おわっていたものとおもわれる。

総会は、エセックス研究所が収蔵する科学分野の資料を委託人に寄託することを決議し、さらに合意文書の作成と資料移管にともなう業務を担当する委員を選出して、散会した。

5日後の5月29日、エセックス研究所の交渉委員会と委託人会議の小委員会とのあいだに、この件についての合意文書が交換された。文章こそ、いかにも公式文書のそれにかきかえられているが、内容は——今後とも、エセックス研究所がうけとった博物学資料は、そのつど、委託人に寄託されるという一項がくわわったほかは——、先のパットナム宛の手紙とことなるところはなかった。

これをうけて、ただちにイースト・インディア・マリン・ホールへ資料をうつす作業がはじまった。

委託人たちが、エセックス研究所から独立した博物館をつくろうとするならば、そこには一定量のコレクションが用意されていなければならなかった。そしておそらく、東インド海運協会から寄託をうけた資料だけでは、不足とかがえられたのであろう。そこでエセックス研究所所蔵資料の一部移管という方策がかがえられたというわけである。

しかも、察するに、この資料の委託人への移管は、パットナムらの人材が「委託人の博物館」に移動したことと、表裏一体の出来事であったようにおもわれる。エセックス研究所から提供されたのが、歴史学や園芸学の資料でなく、とりわけ博物学のそれであったことは、パットナムらが博物学者であったことに対応しているからである。あえていえば、セイラム学派の面々は、研究資料ぐるみ、あたらしい機関に移行することになったのである。

そしておそらく、この間の交渉にあたって、ウィートランドのはたした役割がおおきかったものとおもわれる。前述のように、1900年、モースは東インド海運協会の

創設からかぞえて100年を記念する集会で講演したが、そこで彼が、このときの経過をふりかえりつつ、パットナムにならべて、とくにウィートランド博士の名をあげ、その尽力に対し感謝の意をあらわしたのも [MORSE 1900: 4]、その故であろう。

6月8日、委託人は会合をもって、以上の経過を確認した。

かくして、ウィートランド博士らが、エセックス研究所の基金を強化するべく、1865年夏このかた奔走してきた運動は、おもいがけず、ホールと資料の買収によって東インド海運協会の経済的な危機を救済することになったものの、当のエセックス研究所には、なにもものももたらさずにおわった。そればかりか、同研究所は、エセックス郡博物学協会以来収集してきた博物学コレクションを放出する羽目になってしまったのである。

モースは、パットナムを追悼する集会で、「研究所がうけた財政的なプラスはなに一つなかった。しかし、博物学資料を維持する出費だけは、まぬがれた」と回顧した [MORSE 1916: 194]。さらにホワイトヒルは、それにくわえて「この結果、エセックス研究所は（中略）かがやかしく野心的なわかき動物学者に対する責任から開放されたのだった」 [WHITEHILL 1949: 59] と指摘している。

7.4.

以上のうごきをひとまず要約すると、つぎのようになる。

- (1) 委託人たちは、まず予定どおり東インド海運協会のホールを買収し、その所蔵資料の寄託をうけた。
- (2) つづいて、その建物と資料を核にした「委託人の博物館」が構想され、
- (3) その仕事につく人材をエセックス研究所にもとめた。
- (4) さらに、エセックス研究所から、博物学資料の寄託をうけた。

委託人会議としては、これで、あたらしい博物館を創設するための実質的な手はずは、すべてととのったといつてよかった。あとは、「狂気の若者たち」の手でイースト・インディア・マリン・ホールが改装され、「委託人の博物館」ができあがること、そしてそれを法人化する法的な手続の完了をまつだけとなった。

委託人の会議は、以後、11月9日までひらかれない。

その間、10月30日、委託人会議の初代会長、そしてジョージ・ピーボディーに接触して寄附のきっかけをつくるに多大の功績のあったフランシス・ピーボディーが急死した。11月9日の会合は、その追悼集会であった。委託人の何人かがたつて、フランシス・ピーボディーをしのぶスピーチをおこなっただけで、とくに審議はしていない。

もつとも、会長の死にともない、かわって副会長のエンディコットがさしあたり委託人の仕事を統括することになった。そして、ウィートランドら3人の実務委員会に、法人化の手続をゆだねた。

年がかわって1868年1月13日、委託人は会合をひらいた。議題は、法人化のために提出する文書の承認が中心であったが、とりわけ注目されるのは、この席で、法人化に際して、「委託人の博物館」にくピーボディー科学アカデミーという名称をあたえる議案が採決されたことである。公式の会議録をみるかぎり、これがくピーボディー科学アカデミーの名称が記録にとどめられた初見となる。

そして1868年4月13日、マサチューセッツ州議会は、ピーボディー科学アカデミーを法人化する法案を可決した。ここにピーボディー科学アカデミーは、法的な認知を受け、正式に発足したのである。

また、1868年9月12日の委託人会議で、アカデミーの「規則」がさだめられた。これによって、博物館の制度的な体制がかたまるとともに、その「規則」にしたがって、あらたに運営委員会が組織され、実務の大半が、委託人の手から、この委員会の仕事に移行した。運営委員会は、10月10日にその業務と権限をさだめた「規定」を議決し、その活動を開始する。

7.5.

すこし横道にそれるようであるが、ここで、ジョージ・ピーボディーが寄附をもうして14万ドル、すなわちピーボディー科学アカデミーがその創設に際して基金とした金額は、その当時として、どれほど値打のある額だったのであろうか——という点を検討しておきたい。

先に掲出した表にもうかがえるごとく、ピーボディーが、ハーバード大学、エール大学などに、やはり博物館を建設するために寄附した金額は、これと同額であった。折衝にあたったウィートランドらは、あらかじめ、それらとおなじ額の寄附を要求したのかもしれない。いずれにせよ、ピーボディーの側からすると、この額は、ごく標準的なものであったとみてよい。

ピーボディーの指示によれば、この14万ドルのうち4万ドルは東インド海運協会のホールをかいとるために支出される分であり、事実、そのように執行された。おそらくこの買収価格は、ウィートランドらが海運協会と交渉した結果、すでに確定していたものとおもわれる。したがって、運営資金にあてられるのは、のこりの10万ドルである。ピーボディーは、これを永続基金とすることを要請した。要するに、問題はこ

の10万ドルという金額が、研究機関ないし博物館を運営していくうえで、どの程度の額だったかということになる。

筆者は、19世紀後期の貨幣価値を現代に換算する方法をしらないし、また一般的な換算をしても、この際、あまり有効とはかんがえられないので、ひとまず、これに前後する5年間のエセックス研究所の財政規模を、「所報」に収録されている年次総会の記録（収支決算書に記載されている額）から摘記して参考としたい [ESSEX INSTITUTE 1866-68, 1870]。

1863-64年度	1,768.21ドル	1864-65年度	1,964.63ドル
1865-66年度	5,053.88ドル	1866-67年度	2,521.33ドル
1867-68年度	3,468.24ドル		

これによると、エセックス研究所の会計には、年度によってかなり規模の上下があつて、一概にその平均値を指摘しえないのであるが、いま最大の1865-66年度の5千ドル余をとってみると、ピーボディーがゆだねた10万ドルという額は、およそ20年分のエセックス研究所の会計をまかなうことのできる額ということになるだろうか。おなじく最小の1863-64年度の1千7百ドル余でみると60年ちかくはもつという計算になる。もし、当初のもくろみどおり、この寄附がエセックス研究所に対してなされていたら、それは、疑問の余地なく、同研究所の財政を長期にわたってうるおす結果となつたにちがいがなかつた。

しかし、すでにくりかえし記述したように、現実には、それはピーボディー科学アカデミーという新設機関の基金となつた。ピーボディー科学アカデミー創設後、アカデミーはどれほどの財政規模で運営されたのか。つぎに、それと、この額の関係をみることにする。ここでも、「年報」に収録された会計報告が参考になる。すなわち、1867-69年の2年間の収支決算額は54,412.46ドルに達した [PEABODY ACADEMY OF SCIENCE 1869: 94]。ついで1869-70年度の収支は23,506.14ドルという額になっている [PEABODY ACADEMY OF SCIENCE 1871: 77]。つまりアカデミーは年間約2万数千ドルの経費を必要としており、もし10万ドルの基金をとりつづけていけば、5年たらずで、それは消滅してしまう額でしかなかつたのである。

むろん、アカデミーの会計委員会は、はやくからこのことに気づいており、最初の会計報告のなかで、「とくにこの点について、理事会の注意を喚起したい」とのべていたのであつた [PEABODY ACADEMY OF SCIENCE 1869: 94]。さいわいなことに、1871年の会計報告の時点で、永続基金10万ドルはまだ手つかずのままに確保されていたが、一方で借入金の合計はすでに5,400ドルをかぞえていた。

つまり、エセックス研究所を前提とするならば、ピーボディーの寄附額は、その財政を一定期間にわたって保証するにたるものであったとみなしうるのであるが、あらたに活動を開始したピーボディー科学アカデミーの財源としては、はなはだ心もとない額であり、このままの状態がつづくなら、アカデミーを拠点とした若者たちの理想を実現することは、とうてい不可能だったのである。この事実については、あとであらためて言及することになる。

8. 博物館開館まで

8.1.

かくして、あらたに「委託人の博物館」の責任者に任命されたパットナムとその仲間たちの仕事が開始されることになった。

委託人の管理にうつった東インド海運協会のイースト・インディア・マリン・ホールは、1867年4月16日から2週間にわたって、一般に無料で公開された。その間、名ごりをおしんで、連日、数百人の見学者がおしかけたという。そして、4月30日、かつての東インド海運協会の博物館はとじられ、全面的な改装工事がはじまった。改装のための閉鎖は、2年あまりにおよび、その間、基金から1万6000ドルちかくが、工事にもなう費用として支出されることになる。

以下、パットナムが責任者として委託人会議に提出した初年度の業務報告 [PUTNAM 1869] をもとに、博物館再開までの経過をみることにする。

仕事は、旧博物館に展示されていた資料の撤収から着手された。改装工事に着手するためには、ひとまず、ふるい博物館の資料をかたづけねばならなかったからである。彼らは、資料一点一点にラベルをはり、それらを入念に梱包した。もっとも、旧博物館からうけついで資料は、彼らの構想する新博物館にふさわしいものばかりではなかった。むしろ、撤去された資料のなかには、梱包されたまま、あたらしい展示には使用されなかったものが、すくなくなかった。

やがて、エセックス研究所から寄託される博物学関係の標本が、順次、搬入されてきた。その再分類と整理が、彼らのつぎの重要な仕事となった。もっとも、それらをエセックス研究所からはこびだすのも、同研究所の学芸員を兼務する彼らの仕事にはかならなかったから、おなじ人間が、搬出と搬入にかかわったわけである。

彼らは、これらを管理と展示の便宜を考慮して、剝製などの〈かわいた標本〉と、アルコール漬などの〈しめった標本〉に区分した。彼らの博物館にとっては、これら

エセックス研究所からもたらされた資料に利用価値があった。資料のうち、展示に必要なものについては、分類と整理がすみ次第、直接、予定された陳列棚にならべられていった。

先にのべたように、1868年9月12日、委託人の会合は、ピーボディー科学アカデミーの「規則」をさだめ、博物館としての制度的な体制を整備した。そして同月16日の会合で、その「規則」にもとづき、これまで責任者であったパットナムを博物館長（学芸員を兼任）に、助手のパッカード、ハイアット、モースを学芸員に、それぞれ就任させることをきめた。このとき、設置された部門とその担当学芸員は、つぎのとおりであった。空欄は、その時点で専任の学芸員が充当されていない部門である。

- | | | | |
|------------|-------|--------|-------|
| 1 地質学・古生物学 | ハイアット | 2 鉱物学 | |
| 3 植物学 | | 4 原生動物 | |
| 5 放射相称動物 | モース | 6 軟体動物 | モース |
| 7 関節動物 | パッカード | 8 脊椎動物 | |
| 9 考古学 | | 10 民族学 | ハイアット |

このとき、仲間のうちクックひとりが、なお助手の地位にとどまった。おなじアガシー門下でありながら、彼の地位がひくいのは、どうしたわけだったのであろうか。もっとも、彼は、パットナムのジェネラル・アシスタントとして、多岐にわたる日常の事務にたずさわるかたわら、各種標本の授受・作成・管理などの実務を一手にひきうけていた。パットナムは、その業務報告のなかで、とくにクックの名をあげ、博物館創設期の彼の業績を丁寧に紹介している。

この間に、モースは陳列ケースをはじめ、あたらしい展示手法についての計画立案にたずさわっていた。パットナムは、やはり、おなじ報告のなかで、この方面におけるモースの貢献にくわしく言及している。

撤収作業が進行している間、モース氏は、ホールの改造に関する提案と、あたらしいケースの立案に従事した。計画の基本的な趣旨は、かぎられた空間に可能なかぎり多量のケースを収容することにあった。この目的は、完全に達成された。そして、完成したごとく、このホールは芸術的にはとりたててみばえがしないかもしれないが、スペースをくまなく利用するためにモース氏がとった配慮と、構成の軽快かつ簡潔さは、部屋の用途にふさわしいものである。そのギャラリーと陳列棚は、すべてにおいて適切であり、また、軒や柱で有効な空間を占領してしまう、いかなる建築的効果より、はるかに期待どおりものとなっている [PUTNAM 1869: 41]。

改造プランの大綱は、モースによって作成され、それが、ほぼ採用されたといっ
よかった。

モースがかんがえだした新機軸はいくつかあったが、とりわけ、彼の考案した陳列棚が話題になった。一般に、足もとや頭上は、展示に適さない位置である。棚板が視線をさえぎって、標本をみえにくくしてしまうからである。したがって、この部分には標本を配置しないのが、通例となっている。その分だけ、展示スペースは縮小されるのである。しかし、モースは、陳列棚の角度をかえることによって、そのスペースにも展示ができるようにした。その秘訣は、棚板をささえる腕木を自在に操作できるところにあった。この工夫は、最大限に有効スペースをうみだそうとする、あたらしい博物館には、格好であった。

モースのこの考案は、1868年2月25日付で特許をえた [PUTNAM 1869: 41]。さらに、モースは、このときに考案した陳列棚について、数年のちにアメリカ科学振興協会の大会で研究発表をおこなった [MORSE 1884]。その本文はつたわらないが、要旨だけは、同会の「会報」に掲載されており、また『サイエンス』誌にも紹介されている [MORSE 1883]。

8. 2.

改装後のイースト・インディア・マリン・ホールは、どのように構成されていたのであろうか。それは、およそつぎのような状態であった。

すなわち、今回も、博物館として使用できたのは階上部分だけであった。しかし、その2階をさらに2層に改造した。たしかにそれは、このホールの立端のたかさを最大限に活用する方法であり、可能なかぎり数おおくの展示品を収容しようとする、創設者たちの意図を忠実に反映するものであった。この設計も、モースのアイデアであったにちがいない。

下層には、東西の壁ぎわと、それに並行して展示ケースが列をなしてならんだ。上層は回廊風のギャラリーになり、さらに、陳列棚がならべられた。棚の数は、大小とりまぜて、都合47にもなった。

かつてひろびろとした印象をあたえたホールの内部は、いまや、展示ケースでうめつくされた観があった。しかし、この極端なまでの改造については、それが公開されるや、はたせるかな、一部につよい批判が生じた。開館直後の1869年9月4日、地元のフランク・レスリーズ紙は、ぎっしりつまった陳列棚のあいだをぬうようにして移動する雑踏を、皮肉まじりにえがいてみせたものだった。

また、75年ののち、その再改造の仕事に従事したホワイトヒルらは、おおかたの批判意見を回顧して、つぎのようにかいているのである [FENKINS and WHITEHILL

1944: 14]。

この改築は、ホールの方形の空間をおどろくほど効果的に利用したものであった。(中略)しかし、それは、とりわけすぐれた空間の建築的な質を完全にぶちこわし、同時に、旧博物館からうけついで性格のすべてを破壊してしまったのである。

新博物館の創設者たちが破壊したのは、「空間の建築的な質」だけではなかった。その「性格」において、新旧博物館は、まったくことになっていたのである。

彼らがふたつの機関から継承した資料のうち、縦横に活用されたのは、エセックス研究所から寄託された博物学資料であった。陳列棚の半分以上が、それらによってしめられた。東インド海運協会からひきついで資料のなかでは、民族学資料と若干の船の模型(それも民族学資料の一部として)が展示にもちいられたものの、協会に集積されていた航海や貿易・経済などにかかわる海事史関係資料——今日、それらはピーボディー博物館においてもっとも重要な資料群としてあつかわれている——の利用は、ほとんど顧慮されていなかった。

ここには、創設にあたったメンバーの関心のありかたが正直に反映していた。彼らは、あくまでも博物学もしくは自然誌の博物館をつくらうとしていたのであった。したがって、所与の資料のすべてをバランスよく配置するということはしなかったのである。

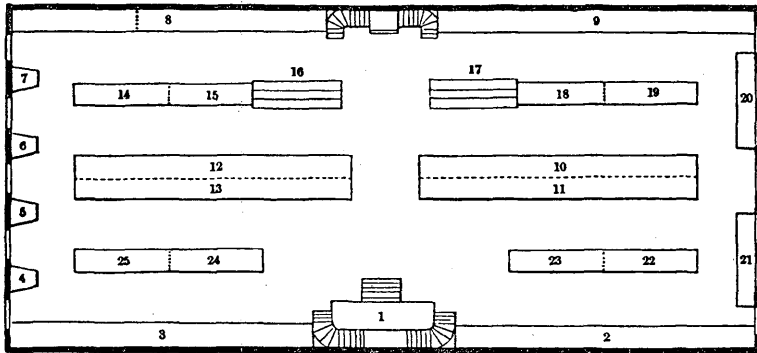
あたらしい博物館の展示プランは、別図でしめたとおりであった。これによってわかるように、彼らは、各種の標本を、純粋に種類別に分類して展示した。その際、その産地・使用地は、ほとんど無視されることになった。いわゆる地域別展示は、彼らの採用するところではなかったのである。どれほど自覚的であったかは別として、当時の彼らの学問傾向からして、地域的な多元性より、それらをつらぬく系統性に注目していたからであろうとおもわれる。

ホワイトヒルらの記述は、この点にもおよんでいる。

エセックス研究所からの地域的な博物学資料をくわえることで、彼らは、もっとも下等な生命から人類にいたるまでの進化の過程を提示する、広範囲な動物学の博物館を確立しようとかんがえたのである [FENKINS and WHITEHILL 1944: 14]。

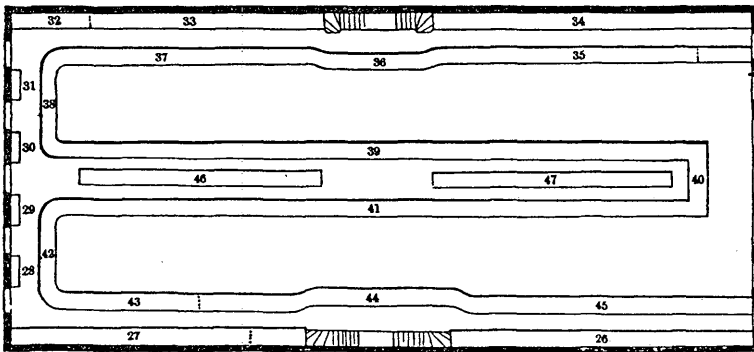
ピーボディー科学アカデミーの創設にかかわった若者たちが、この時点ですでに進化論にかたむいていたかは、なお慎重に検討してみなくてはならないにもせよ、彼らが彼らの意図どおりの博物館をつくらうとしていたことだけは、ホワイトヒルらの指摘をまつまでもなかったのである。

こうして、あたらしくできようとしていた博物館は、みかけのうえからしても、ま



Floor of East India Marine Hall as rebuilt in 1867

1. Large case over entrance stairway, contains a number of life size clay models of the several castes of natives of India, and a large number of smaller models of a similar character; 2. Wall cases, portion of the Ethnological collection relating to costumes and burial; 3. Wall cases, portion of the Ethnological collection relating to the Arts, Manufactures, Domestic and Musical Implements and Pipes; 4-5. Alcove cases, Idols; 6-7. Alcove cases, portion of the Osteological collection; 8. Wall cases, a portion of the Osteological collection and the stuffed specimens of Fishes and Reptiles; 9. Wall cases, Palaeontological collection; 10-11. Large central case, Sponges, Corals and Echinoderms; 12-13. Large central case, mounted skins of Birds and Mammals; 14-15. Table cases, Shells; 16-17. Upright cases intended for the Alcoholic Mollusks above, and the large shells below, but 16 is temporarily used for Bird's nests and Eggs, and 17 for Fossils; 18-25. Table cases, Shells.



Gallery of East India Marine Hall as rebuilt in 1867

26. Wall cases, contain Implements of War, etc.; 27. Wall cases, Implements of War, etc., and models of Boats and Ships, and of various kinds of Paddles. The space above the cases in this section of the Gallery is given to the exhibition of large Boats and other means of transportation; 28-31. Wall cases between windows, Botanical specimens; 32-37. All the cases on this Gallery are devoted to the Essex County Collection. The space over the wall cases on this Gallery is occupied by large stuffed specimens of County Fishes; 38-43. Railing cases, Entomological Collection; 44-45. Railing cases, Archaeological Collection, principally consisting of Stone Implements; 46. Upright case, Alcoholic Fishes; 47. Upright cases, Alcoholic Insects and other Articulates. On top of these central upright cases will be placed the large stuffed specimens of the Sawfish and Shark, now in course of preparation. On the Iron railing of the Gallery are arranged, on the Zoological side a large number of Horns of various animals, and on the Ethnological side all the Spears, etc., that were too long to go into the cases, also a number of Pictures of Ethnological interest. Over the entrance to the Hall and projecting from the railing are full rigged and large models of three ships of early construction.

図1 ピーボディー科学アカデミー博物館の展示構成

た展示品の内容からしても、旧博物館を抜本的に改造するものとなった。

ただし、1階のエセックス・ストリートに面した部分は、従来どおり貸事務所として、その収益は、アカデミーの運営資金にあてられた。奥の半分は、アカデミーの事務所と倉庫に使用された。しかし、結局、図書室や講堂に使用する場所をうみだすことはできなかった。むしろ、彼らの新博物館構想のなかには、図書の整備や講演会活動もふくまれていた。

パットナムは、蔵書を充実させるには、アカデミーが独自の出版物をもち、それと交換するかたちで、他の機関の出版物を入手するのが得策であるとかんがえた。そこでアカデミーは、1869年度に『メモアール』の第1巻第1号を発刊した。この刊行物は、1878年の第1巻第6号まで断続的に発行され、1886年に第2巻第1号・第2号を発行しておわった。なお、その第2巻第1号が、モースの代表作『日本のすまい』[MORSE 1886]であったことは、かきそえるにたる事実であろう。

また、講堂がなかったにもかかわらず、彼らは、各地に出張講演にでむいた。その最初は、ニュー・ベリーポートの教育委員会の要請にこたえたもので、1868年12月から翌年の1月にかけておこなわれた。やがて彼らは、生物学夏季講習会を開催するようになる[DEXTER 1957]。その受講者名簿のなかには、Mr. Takamine (高嶺秀夫) や Mr. H. Saze (佐瀬秀三郎) といった日本人の名前をみいだすことができる[PEABODY ACADEMY OF SCIENCE 1885: 55-64]。

こうした準備作業のなかで、彼らは、アカデミーの将来像について、さまざまな議論をかさねたようであり、その一部は、文章となってパットナムの業務報告のなかに収録されているのであるが、この点については、あとでもう一度、あらためて話題になるはずである。

8. 3.

博物館創設の仕事に並行して、月刊誌の刊行が開始された。セイラム学派の機関誌ともいうべき『アメリカン・ナチュラリスト』が、それである。副題には「一般むけの絵入り雑誌 (Popular Illustrated Magazine)」とある。編者には、パットナム、パッカード、ハイアット、モースの4人が、そろって名をつらねていた。この雑誌が、セイラム学派の機関誌と目される所以である。ただし、ここでも仲間であるはずのクックの名が、編集スタッフの連名からおちている。

パットナムが編集長、パッカードが編集の実務を、ハイアットが書物の保管を、そしてモースが書記として発送に関する業務を分担した。クックは、編者として名をだ

すことはなかったが、パットナムの助手として、この出版にかかわる日常業務に従事していた。

1867年3月に『アメリカン・ナチュラリスト』の第1巻第1号が、エセックス研究所から発行された。その直後、編者のひとりであるパッカーが父にあてた手紙によると、第1号は1000部以上がうれ、第2号からは2000部を印刷する予定だといっている。また2年目からは、2500部を印刷し、そのうち2100部が定期的にはけていたといわれる [DEXTER 1956: 210]。

この数字が信じられるとすれば、あたらしい雑誌は歓迎され、成功裏に出発したといえるであろう。

第1巻をみるかぎり、とりわけモースの健闘が顕著であった。第1号の巻頭をかざったのはモースの論文にほかならなかったし [MORSE 1867]、このほかにもモースは数編の論文やさまざまな雑報・書評欄などを担当している。論文の数こそ、パッカーの5本におよばなかったが、その執筆量は、他の3人にくらべて、抜群であった。モースの動物学者としての成長期と、この雑誌の発刊が、期せずして一致していたことが、この旺盛な執筆意欲につながったものとみてよい。

また彼は、生物画の画工としての経験 [DEXTER 1967] をいかして、おおくの挿絵の作成にもあたった。そのなかには、モースの人柄をうかがわせる、ユーモアにとんだカットがふくまれていた。顕微鏡をのぞくカタツムリを戯画化した、有名なカットは、この雑誌の創刊号のためのものであった。

彼らが、あたらしい機関の職員に任命されるのは、『アメリカン・ナチュラリスト』が創刊された年の5月のことであった。そして、翌年の第2巻第1号(1868年3月刊)から、発行はピーボディー科学アカデミーにうつる。いうまでもなく、それは、編者たちの活動の場が、エセックス研究所からピーボディー科学アカデミーに移行したことの端的なあらわれであった。以後、ピーボディー科学アカデミーと『アメリカン・ナチュラリスト』は、セイラム学派の二枚看板となった。

1868年1月13日の会合で、ピーボディー寄金の委託人らは、その編者たちから『アメリカン・ナチュラリスト』の発行にかかわる資金援助についての要請をうけることになった。委託人会議の議事録には、翌日の会合で、この事業が、「自然科学の研究に対する感覚を開発し発展させる重要な手段」とみなしうるか否かをめぐって、長時間にわたる討議がなされたことが記録されている。委託人の一人であるマーシュ博士——彼は、この件について、事前にパットナムと協議していた——の、つよい推薦があって、結局、基金から4000ドルという多額を支出する決定をみたのである。

しかし、その4000ドルの補助は、あくまでも「融資」というかたちをとるにとどまった。エセックス研究所にしても、またピーボディー科学アカデミーにしても、いわば底をかしたただけであって、『アメリカン・ナチュラリスト』刊行の責任は、経済面もふくめて、あくまでも編者にあった。

ウェイマンは、この雑誌の発行にあたって、パットナムら編者4人が確認した協定の文書を紹介している [ウェイマン 1976a: 264]。

次の費用は最初に、そして次の順で払われるべきである。1,用紙 2,印刷 3,彫版 4,製本 5,雑費 6,広告 7,作画 8,編集長の年間実費、食費、衣料費、旅費。もし以上の費用を支払って残金があれば、その貢献度に応じて、編集者の間で分配するものとする。

これをみると、彼ら自身が、この雑誌の刊行が採算にあわないであろうという予測をもっていたことがわかる。1号分の発行に500ドルがみこまれたという。パットナムは、みずからセイラム・プレスという印刷所を開業して、あらかじめ印刷経費の節減をかんがえたほどである。それはまた、この雑誌の刊行にかかる、彼らの、なみなみならぬ決意のほどをうかがわせる逸話であった。

8. 4.

このように、『アメリカン・ナチュラリスト』は、セイラム学派にとって、その同人誌ともいべき性格をもっていたが、同時にアメリカの科学史のうえでも、記憶するにたる役割を演じた。

その刊行の言葉のなかに、つぎのような一節をみいだすことができる。

我々は、この雑誌が、農業経営者・庭園家・技術者に歓迎されるであろうことをうたがわない。我々は、自然の研究からみちびかれた実際的な利益を指摘するよう努力するつもりである [American Naturalist 1867: 2]。

すなわち『アメリカン・ナチュラリスト』の第一の意義は、それが、ことさら副題に“Popular Illustrated Magazine”と標榜したとおり、一般読者を対象とした科学雑誌であった点にみとめられる。そしてその種の雑誌として、本誌は、アメリカで最初のものとなった。2500という発行部数は、今日からみれば、かならずしもおおい量とはいえないが、当時であれば破格の数字だったと理解すべきであろう。同種の科学雑誌としては、『ポピュラー・サイエンス・マンスリー』が、5年後の1872年5月に創刊されて、『アメリカン・ナチュラリスト』につづいた。

もっとも、ここでいう「一般むけ」を大衆的・通俗的と理解すると、おもわぬ誤解におちいることになる。この雑誌に収録された論文は、専門論文とは多少おもむきを

ことにするとはいえ、大半がすぐれて高度な水準の論文であった。「絵いり」といっても、そこに掲載された挿図は、いわゆるカットをのぞけば、これまたすべて専門誌と同様とまではいわずとも、精密な生物画であって、いわゆる啓蒙的な図解の類ではない。それは、限定された会員にしか配布されない学会誌あるいは機関誌に対して、不特定の読者を想定して市販されるという意味での「一般」とみるのが、どちらかといえば、実態にちかかったのではないか。

その意味では、編者の期待したように、この雑誌が「農業経営者・庭園家・技術者」に理解され、彼らの現実的な用にたちえたのかどうか、いささかならず疑問とすべきところであった。

また、刊行の辞は、つぎのようにもいっている。

ダーウィンは、彼の著書『種の起源』のなかで、農場や庭園でえられた経験から、彼のもっとも重要な事実のおおくを採集している。そしてそのような事実のすべてが、牛飼や園芸家にとって、現実的な価値をもつのである [Anon. 1867: 3]。

ここでも、学問の現実的な有用性が強調されているのであるが、それがダーウィンの業績を紹介するかたちでとかれているところに注目しなくてはならないであろう。むろん、この文章のなかには、創造者とか天地創造といった言葉も散見されるのであり、この刊行の辞をもって、当時、セイラム学派のメンバーが進化論に傾斜していたと理解するのは早計にすぎる。しかし、すくなくともここには、編者たちのダーウィンの仕事に対する関心もしくは共感をうかがうことができるのである。

すなわち、『アメリカン・ナチュラリスト』発刊の第二の意義は、まさにそれが、アメリカにおけるダーウィニズムへの関心のたかまりと呼応していた点にみとめられる。ここには、生物の進化を証明すべくおこなわれた研究や、あるいはそれを批判する論説が、つぎつぎと掲載された。この雑誌は、アメリカにおいてダーウィン学説の可否を論じあう最初の雑誌としての役割を演じることになり、かつ、セイラム学派のメンバーが進化論に同調していく足跡をしめす結果にもなったのである。そして、すでに老境にあったダーウィン自身が、またこの雑誌にのったいくつかの論文に啓発されるところがあったとみられている [渡辺 1976: 82-83]。

ちなみに、この進化論への傾斜は、『アメリカン・ナチュラリスト』のあとをおった『ポピュラー・サイエンス・マンスリー』に、よりいっそう顕著であった。同誌には、ダーウィンの生物進化論ばかりでなく、スペンサー流の社会進化論をめぐる論文も、数おおく掲載されることになる。

9. セイラム学派——その栄光と挫折——

9.1.

ピーボディー科学アカデミーの博物館は、1869年の春には改装を完了し、5月5日を期して、無料で一般公開されることになった。

東インド海運協会の旧博物館が閉鎖されてこのかた、2年ぶりの開館であった。混雑をさけるため、新聞などでの公示がひかえられたにもかかわらず、初日にすでに100人以上が来観した。そしてその年の年末までに、2万6000人の入場者をかぞえた。博物館がひらかれているのは週に5日であったから、1日平均およそ190人が入場した勘定になる [WHITEHILL 1949: 67]。あたらしい博物館のスタートは、まず順調であった。

公式の開館式典は、一般公開よりすこしおくれて、8月18日に予定された。それは、その18日から24日までの間、アメリカ科学振興協会 (American Association for Advancement of Science) の18回大会が、セイラムで開催されることになっており、その会期にあわせて、ピーボディー科学アカデミーの開館記念行事をおこなうことが計画されたのである。

アメリカ科学振興協会は、さしずめ、アメリカ合衆国における自然科学諸分野の学会連合とでもいうべき団体である。1848年に、それまでのアメリカ地質学者・博物学者協会が発展的に改組して、第1回の大会をもった。したがって、このとき、結成以来まだ20年とたっていなかったが、すでに会員数7百余をかぞえ、広範な科学者を包含する組織として、アメリカでもっとも権威のある学会となっていた。

この学会は、毎年1回、ところをかえて年次大会をもった。そしてその大会は、たとえば、フィラデルフィアでおこなわれた第1回の大会をフィラデルフィア・ミーティングとよぶように、それぞれの開催地の名をとって通称としていた。セイラムでおこなわれる第18回大会は、すなわちセイラム・ミーティングである。

セイラム・ミーティングには244人の会員が参加し、市内の2会場——エセックス郡裁判所とタバナスル教会——にわかれて、9の分科会で、162の論文が発表された。その成果は、翌年に発行された同会の「会報」第18巻 (Proceedings of The Association for Advancement of Science, 1870) に、もれなく収録されている。

地元セイラムで現地委員会の議長をつとめたのは、セイラム文化人を代表する立場にあったウィートランドである [AMERICAN ASSOCIATION FOR ADVANCEMENT OF SCIENCE 1870]。

この大会は、顕微鏡家の特別集会（そのために器具・設備・スライドが現地委員会の手で準備された）が組織されたこと、はじめて考古学・民族学分会が設置されたこと、エセックス研究所の主催で、学会員が地元の研究者とともにアン岬の見学にでかけたこと、蒸気船によるマサチューセッツ湾一日周遊——これはセイラム市がスポンサーになった——がおこなわれたことなど、アメリカ科学振興協会の歴史のうえでも、話題にとんだ会合となった [DEXTER 1957]。

とりわけ、大会初日の8月18日に举行されたピーボディー科学アカデミーの開館式典は、記憶にとどめられる出来事であった。

先にのべたように、あたらしい博物館は、大勢の参会者を収容する場所を用意することができなかった。式典の会場には、大会の会場にもなったタバナスル教会があてられた。式典に地元の市民が列席したのはむろんであったが、大会に参加するためにやってきたアメリカ科学振興協会の会員が多数参列して、あたらしい博物館の誕生を祝福した。

式典は、タバナスル教会の牧師の祈禱ののち、委託人会議の会長のエンディコットが、運営委員会のウィートランドから新装なった建物をうけとり、それを館長のパトナムの管理にゆだねる——という儀式によって構成された。そのあとセイラム・オラトリオのメンバーによって賛歌がうたわれ、セイラム市長・東インド海運協会会長・エセックス研究所会長など関係者の挨拶があり、さらに来賓の祝辞が、かたどおりにつづいた。

ところで、ピーボディー科学アカデミーのうみの親ともいべきジョージ・ピーボディーは、このとき、アメリカにきていたのであるが、健康状態がすぐれず、式典の当日には、ウエスト・バージニアで休養中であった。したがって、彼自身は式典に出席できず、代理人を出席させるにとどまった。ただ、彼は、このセイラム・ミーティングの開催費用の一部として、400ドルを現地委員会に寄附した。おそらく、ウィートランドの要請があったのであろう。

もっとも、彼は、これより前、セイラムにきていた。すなわち彼は、1869年5月29日にイギリスをたち、ニュー・ヨークにつくと、その足でボストンにいき、数日後には、セイラムへきた。そして甥のピーボディー・ラッセル夫妻のもとで、7月下旬まですごした。7月の14日には、デンバーのピーボディー研究所の開所式に出席して、挨拶をおこなっている。したがって、このセイラム滞在の間に、完成したピーボディー科学アカデミーを目にする機会があったものとおもわれる。

そして式典にも、当然、出席するつもりであったにちがいない。しかし、彼の健康

を気づかうラッセルらのすすめにしたがって、ウエスト・バージニアへ療養にでかけ、ついに、式典の日まで回復しなかったのである。ウェイマンが、ジョージ・ピーボディーが開館の式典に出席したようにかいているのは、なにかのまちがいであった。

ジョージ・ピーボディーの今回のアメリカ滞在は、彼の最後の帰国になった。

9. 2.

いずれにせよ、アメリカ科学振興協会が、大会の開催地にセイラムをえらぶにあたっては、この式典のおこなわれることが念頭におかれていたものとおもわれる。また地元でも、それを予定したウィートランドやパットナムが、大会のセイラム誘致をはたらきかけたのであろう。ピーボディー科学アカデミーでは、1868年10月10日の委託人の会合で、エセックス研究所と共同してその誘致をはかることをきめていた。

ことに、アガシーのもとをさった青年博物学者にとって、彼らの作品ともいべき博物館の開館式を、もっとも権威のある学会の大会開催とともにおこなうことは、いわば晴の舞台をみずから演出することにほかならなかった。それは、彼らのなしとげた成果を提示することにより、セイラム学派の存在を全米の科学者に認知させる絶好の機会になるにちがいがなかった。

そして、事実、この大会を通じて、セイラム学派は、アメリカ科学界において完全にエスタブリッシュされた。このセイラム・ミーティングの席上、パットナムがアメリカ科学振興協会の常任理事（代行）への就任を要請された一事が、なによりもそれを雄弁にものごとっていた。パットナムは、その後1871年に幹事長に、1873年には正式に常任理事に選任される。

いうまでもなく、それをもたらしたのは、ピーボディー科学アカデミー博物館のすぐれたできばえによってであったが、もうひとつには、この大会で彼らがおこなった研究発表によせられた、たかい評価によるところがおおきかった。しかも、その評価を決定づけたのは、旧師アガシーの発言であった。

アガシーは、アメリカ科学振興協会の中心的人物のひとりであった。むろん、彼は、この大会にも出席し、分科会 B、すなわち博物学分科会の座長をつとめた。そしてその分科会で、パットナム、ハイアット、モースが、つぎつぎと研究発表をおこなったのである。彼らとアガシーの関係をしるものにとっては、アガシーの反応が注目される場所であった。

モースが発表——それは、ランプ貝（短頭類）は軟体動物ではなく、むしろ環虫と関係があるという趣旨の内容であった [MORSE 1869]——をおえたときの様子が、

後年、『ザ・クリスチャン・レジスター』によって、かきとめられている。

(モースの研究発表がおわったとき-筆者註) すべての目が、アガシーにそそがれた。彼は、彼の学生の、このかがやかしい発見について、なにを発言するのであろうか。彼は、ゆっくりと壇上にのぼった。そして、威厳と親愛をこめて、いった。「皆さん、科学の歴史にとってはじめに、我々は、短頭類の学問的研究に接することができたのであります」[DEXTER 1965: 37]。

モースの研究は、学問的にアガシーの承認をうけたのであった。

さらにアガシーは、最終日の総括講演のなかで、ピーボディ科学アカデミーに席をおく研究者の業績に言及し、それらは、本大会で発表された論文のなかで最上のものであるとのべた。参会者は、アガシーの公正な態度に好感をいだいた。彼らのおおくが、セイラム学派の業績を評価していたからである [DEXTER 1957]。

これより何日か前、アガシーは、アカデミーの開館式で来賓として祝辞をのべ、あたらしい博物館のできばえをたたえた。アカデミーに所属する学者の研究に対するアガシーのたかい評価は、それが、式辞にありがちなレトリックでなかったことをものがたっていた。セイラムにきたアガシーは、かつて彼のもとをさっていった弟子たちの才能と努力によって完成した博物館を目のあたりにし、さらに彼らの研究発表に接し、その成果を率直にみとめたのであった。

もっとも、よそ目には、突然ともみえるアガシーの軟化であったが、アガシーはかねてセイラム学派の発刊した『アメリカン・ナチュラリスト』に注目していた。アガシーは、1867年6月19日付のテオドール・ライマンの手紙に託して、アガシーが比較動物学博物館宛におくられてきた『アメリカン・ナチュラリスト』の第1号から第4号までをうけとったこと、それが「有益かつ立派」な出版物であること、そして彼がそれをおくってもらったことに「心から感謝している」旨をつたえていたのであった [DEXTER 1956: 212]。

しかも、アガシーは、セイラム滞在中に、夕食の席をもうけ、かつての弟子たちをまねき、パットナムらも、これに応じたという [DEXTER 1965]。おそらく、双方がたもとをわかって以来、ひさかたぶりに実現した、師弟水いらずの会食であったにちがいない。その席につらなったベルリ——彼もアガシーのかつての弟子であり、当時、ブラウン大学の教授になっていた——は、後年、そのときのアガシーがことのほか上機嫌であったことを回想している。

アメリカの科学史家は、このセイラム・ミーティングの数日間に、アガシーとその門弟たち——セイラム学派の若者との和解のきざしをみとめる。

そしてその直後、1870年の夏から、アガシーとその門下生たちは、ふたたび共同し

て、あたらしい事業をおこす。アガシーは、彼の主宰するペネキースにおける臨海講習会に、彼らを講師として招聘したのである。この講習会は、1873年のアガシーの逝去によって、かならずしも充分なのみりをみないうちに中断するが、門下生のなかに、これを継承しようとするうごきがあらわれるなど、その後の学会にあたえた影響は、すくなからざるものがあった。

9.3.

1869年におけるピーボディー科学アカデミーの開館、セイラム・ミーティングの成功、そしておもいがけないアガシーとの和解をへて、セイラム学派は栄光の時をむかえたといってよかった。しかも、1873年、パットナムがアメリカ科学振興協会常任理事に就任したのを機に、同会の本部がセイラムにおかれることになった。パットナムはアカデミーに一室を確保して、そこに協会の年報や公式書類、図書などを保管した。またパットナムが『アメリカン・ナチュラリスト』の発刊に際して用意したセイラム・プレスが、協会の機関誌の印刷にあたった。

セイラムは一時期、アメリカ科学界の中心になったのである。

しかし、その前後から、はやくもこの学派の崩壊がきざした。すなわち、セイラム・ミーティングから2年後の1871年には、どうしたわけか、モースとハイアットがそろってアカデミーからはなれた。同時に、彼ら2人は、『アメリカン・ナチュラリスト』の正式な編者の位置からもはずれて、編集協力者に後退した。

彼らが、アカデミーをさった理由は、よくわからない。

その後、モースはボードン大学に動物学教授の席をえ、ハイアットは古巣のボストン博物学協会の学芸員に復帰したところから推測するに、直接的な理由は、それぞれから勧誘があった結果とかがえられるが、彼らが、このあたらしい機関の創設にかたむけた、なみなみならぬ情熱をおもうなら、その早々の退職は、いかにも唐突の感を否めないのである。

モースのアカデミー退職について、ウェイマンは、モースの気性と経済的な事情をあげている。

彼にはいつでも、角を曲った所に新しい何ものかがあった。そしてその何ものかを探しに行かねばならなかった。4年が経過して後、ピーボディー博物館は軌道に乗り、日々滞りなく安定してきた。そうなると、もはやモースの強い情熱を必要としなかった。彼は講演に成功を収め、懸命に働いた5カ月で、あとの7カ月間研究に専念できるほど、十分に稼がせてくれるようになった [ウェイマン 1976a: 269-270]。

(中略)

モースにとっては、講演をすることが生計を得る手段であった。(中略)とにかく自分自身の科学研究を継続するためには、日常生活に必要な金額以上に金が必要だった [ウェイマン 1976a: 271]。

この説明には、かならずしも納得しがたいところがある。

第一に、モースのうつり気が退職の理由のひとつであったとすれば、10年後、モースがアカデミーにもどり、館長になって以後、その死をむかえるまで40年あまりにわたって、その職をつづけた根気は、どのように説明するのであろうか。筆者の印象では、モースの持続力は人なみはずれたものがあったといえる。

第二に、彼のアカデミー学芸員としての収入は、1000ドルであったといわれる [WHITEHILL 1949: 143]。それを、たとえば比較動物学博物館創設時のアガシーの年俸1500ドル [ウェイマン 1976a: 181] とくらべるなら、彼の年齢・経験などからして、極端にひくい額とはいえないであろう。しかもモースには講演という特技があり、それによる副収入もあった。

さらにウェイマンは、アカデミーの仕事が研究活動を阻害したようにほめかしているが、これについても、1870年度における彼らの活発なフィールド・ワークをおもえば、アカデミーに席をおくことが、さして研究の障害になっていたとは、かんがえられない。これ以前にも、モースは標本を調査するために、アカデミーを留守にして足しげくボストンの博物学協会にかよっており、そのことを学芸員としての年度報告にかいている [MORSE 1869: 74]。アカデミーにおいて、研究は公務であったはずである。

ハイアットはボストンにかえったが、モースはセイラムにすみつづけた。彼は、そののちも、アカデミーやエセックス研究所の事業に協力し、それぞれの集会などでも活発に発言しているから、所属の変更は、本人にとってさほど重大な問題でなかった——というみかたができるかもしれない。

しかし、1875年になると、今度は、セイラム学派の盟主ともいべきパットナムが、ハーバード大学の考古学・人類学ピーボディー博物館からの勧誘を受諾して、アカデミーをさった。これを機会に、彼は、『アメリカン・ナチュラリスト』の編者からも身をひいた。そのあとは、パッカーが、パットナムの仕事をはきついで、パットナム同様に『アメリカン・ナチュラリスト』の編集責任者とピーボディー科学アカデミー博物館長の両方をつとめたが、結局、彼も1879年度いっばいで館長を辞し、ブラウン大学の教授となって赴任した。

さらに1880年には、終始不遇であったケールブ・クックが病死する。

この時点で、かつてセイラム学派を形成したメンバーは、すべてアカデミーからいなくなりました。これよりまえ、1877年の第10巻から、『アメリカン・ナチュラリスト』の発行母体は、すでに、セイラムからボストンにうつっていた。

セイラム学派は解消したといってよかった。

9.4.

セイラム学派形成の過程は、比較的明瞭であったが、その解消の事情は、かならずしも分明的でない。この間、彼らのあいだに、内輪もめがあった気配は、まったくない。むしろ、彼らは、その後も、親交をふかめて晩年にいたるのである。したがって、セイラム学派解消が彼らの内部崩壊であった可能性は、この際、考慮しなくてもよいであろう。

むしろ、彼らと彼らを取りまく条件とのなかに、その真相をもとめるのがただしいのではないか。そのようにかんがえれば、実は、おもいあたる事柄が、いくつかあるのである。

まず第一に、あらためて注目しておきたいのが、アカデミーの「年報」第1号に収録された“Proposed Plan of Operations”と題する6ページたらずの文書である[PEABODY ACADEMY OF SCIENCE 1869: 86-91]。それは、ややながい序文と、7項目の「計画の原則」、6項目の「具体的計画」からなる提案であった。その提案書には、博物館が創設されたのち、ピーボディー科学アカデミーがおこなうべき活動のありかたが詳細にかきしるされていた。

これには署名もなく、日付も欠いているが、記載内容から判断して、博物館創設の過程で——おそらく博物館としての体制がととのった1868年度に——、パットナムらによって作成されたものであることは、推測にかたくない。

そこには、彼らの構想する博物館活動の、いわば理想像がしめされていた。しかし、筆者はいま、その内容の詳細を紹介する情熱をもたない。なぜならば、この文書にしめされた理想は、まったくといってよいほど、実現しなかったからである。これは挫折した提案書であった。博物館の創設において、彼らは、ほぼ理想どおりのことをやってのけた。しかし、その運営にあたって、彼らは理想を達成できなかったというわけなのである。

さしあたり、かんがえうる理由は、まず財政的な限界が目に見えていたところに、あったとおもわれる。ジョージ・ピーボディーは、将来、その基金を補充する意志をもっていたといわれる。ところがアカデミーの博物館が開館したすぐあと、1869年11

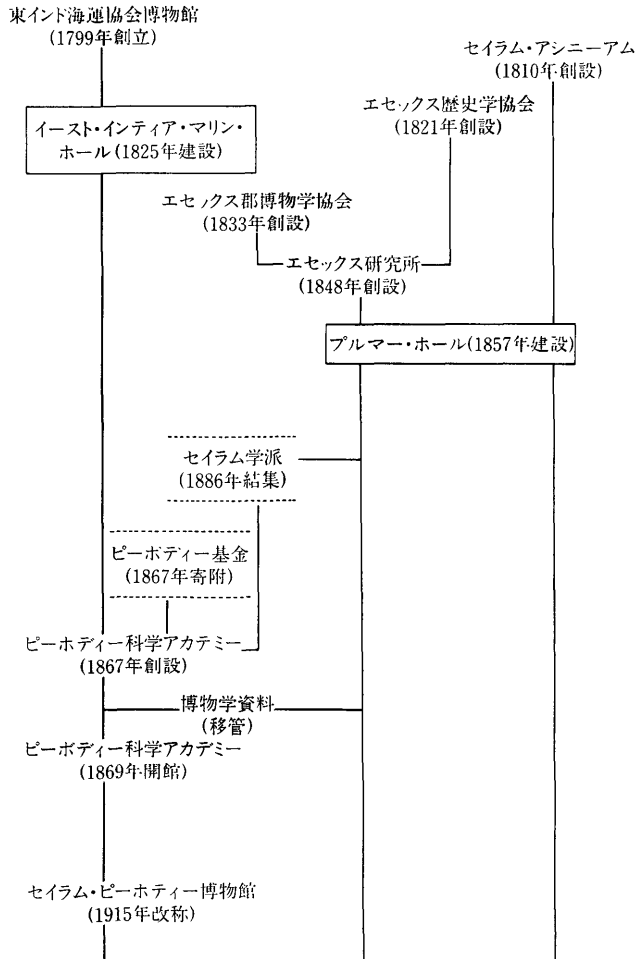


図2 ピーボディー科学アカデミーの成立経過

月の彼の死によって、寄金の補給は、ついに実現しなかった。ピーボディーなきあと、別口の資金補給を期待することは、もはや無理というものであった。ジョージ・ピーボディーからの寄金14万ドルが、この機関の運営に不十分な額であったことは、すでに分析したとおりである。これでは、彼らの理想的活動の持続は保障しがたかった。

その限界が、おそかれはやかれ、彼らをピーボディー科学アカデミーからはなれさせていく結果につながったのではないか——というのが、当面の筆者の見解のひとつである。

したがって、セイラム学派の解消の理由は、その形成とまったくおなじことなのであった。すなわち、メンバーがすぐれて有能であったこと、そしてその学派がほかならぬセイラムにおいて形成されたこと、このふたつによってセイラム学派は形成され、

そして同様の理由によって消滅したのである。

このことをかんがえる場合には、アカデミーをさった彼らのおおくが、即座に、もしくはやがて大学に席をえたという事実のもつ歴史的な意味をあわせて考慮にいれておく必要がある。アメリカにおける学問が、アカデミズムを確立しつつある大学に場をうつしつつあったという一般的な動向から、彼らだけが自由であったわけはなかった [園田 n.d.]。そのような大学は、有能な彼らをみすてておくはずがなく、ピーボディー科学アカデミー、ひいては、いまや一地方都市でしかなかったセイラムに、これ以上、彼らの才能をひきとめておく力はなかったのである。

しかも、時代は、エセックス研究所やピーボディー科学アカデミーのような民間の研究機関が前衛の役割をはたす時期から、大学におけるアカデミーへとうつる、その端境期にあったのである [潮木 1982]。ひとりピーボディー科学アカデミーにかぎらず、ジョージ・ピーボディーの基金によって設立された諸機関のおおくが、かならずしもその後、順調な発展をとげない理由も、民間の学問と大学のアカデミズムの確立という構図のなかでとらえることができるかもしれない。

そして筆者は、セイラム学派の栄光と挫折の歴史的位相を、そのあたりにみとめるのである。——だとすれば、セイラム学派の何年かは、それに参加した若者たちにとって青春の一齣であったばかりでなく、ひいては、アメリカの科学史における過渡期の一齣であったといってもよかったのである。

1881年夏、日本からかえったばかりのモースが、ピーボディー科学アカデミーに復帰し、パッカードが辞任して以来しばらく空席になっていた博物館長に就任した。創設期をおえたアカデミーにとっては、あたらしい時代、すなわちモースの時代をむかえる。

これまでのべてきた事実関係を表示して、ひとまず筆をおさめる。

付 記

この研究を公刊するにあたり、まず、プリンストン大学のマーティン・コルカット教授に心からの感謝をささげたい。

筆者は、1985年8月より1986年7月にかけて、プリンストン大学東洋学部に客員研究員として滞在する機会にめぐまれた。本稿は、まだ完成していない他の2~3の原稿とともに、この期間に準備され、執筆されたものである。プリンストン大学というゆたかな環境と1年間というまとまった時間がなければ、おそらく本稿は永遠に完成しなかったにちがいない。この機会は、ほかならぬコルカット教授の御厚意によってあたえられたものであった。コルカット教授には、日本における進化論の導入にはたしたモースの業績についての論文があり [COLLCUTT 1984]、筆者のモース研究にも、さまざまな便宜をはかってくださったのである。

あわせて筆者は、ピーター・フェチコ館長をはじめ、セイラム・ピーボディー博物館の方々、とりわけジャック・セイヤー、桂子夫妻にお礼をもうしのべなくてはならない。

プリンストン滞在中にも何度かセイラムをたずねることがあり、そのつど御夫妻にお世話になった。また、手紙や電話を通じて、研究上の支援や激励をいただいた。筆者のモースへの関心がセイヤー氏とのであいにはじまることは、すでに別のところでのべたとおりであるが[守屋1985b]、そのことをおもうにつけ、セイヤー氏との交流は、本稿をなすうえでもおおきな力となっているのである。

また、本稿が活字になるについては、何人かの方の、お力ぞえがあった。慶応大学の磯野直秀教授は、本稿の草稿に目とおしてくださり、有益な御教示をあたえられた。にもかかわらず、その示唆が十分に吸収しきれていないのではないかと、おそれる。また、国立民族学博物館の出版委員会の垂水稔・中山和芳委員は、原稿をていねいに検討され、不注意な箇所の指摘をいただいたほか、両委員は題名についても相談にのってくださった。校正に協力してくださったのは、園田貴子さんである。ここに、記して謝意を表するものである。

文 献

AMERICAN ASSOCIATION FOR ADVANCEMENT OF SCIENCE

1870a Executive Proceedings of The Salem Meeting; 1869. *Proceedings of The American Association for Advancement of Science* 18: 285-308.

1870b *Proceedings of The American Association for Advancement of Science*, vol. 18. *American Naturalist*

1867 Introductory. *The American Naturalist* 1: 1-4.

ASHTON, Joseph N.

1917 *The Salem Athenaeum; 1810-1910*. Salem.

BARRY, William D.

1982 *A Vignetted History of Portland Business; 1633-1982*. The Newcomen Society in North America.

BELKNAP, Henry W.

1921 Address. *Annual Report of the Essex Institute* (1921): 24-39.

BOSTON SOCIETY OF NATURAL HISTORY

1860 *Proceedings of Boston Society of Natural History*, vol. 7.

CHAPPLE, William D.

1948 *George Peabody*. Salem: Peabody Museum of Salem.

COLLCUTT, M.

1984 E. S. Morse and the Introduction of Darwinism to Japan. 『こすもす』 8: 8-26.

CONKLIN, Edwin G.

1944 The Early History of the American Naturalist. *The American Naturalist* 78: 29-37.

CURRY, J. L. M.

1898 *A Brief Sketch of George Peabody and A History of the Peabody Education Fund through Thirty Years*. Cambridge: Harvard University Press.

CURTI, Merle

1971 Foreword. *George Peabody; A Biography (by Parker)*, pp. ix-x.

DEXTER, Ralph W.

1956 The early American Naturalist as revealed by letters to the Founders. *The American Naturalist* 90: 209-225.

1957a The Summer School at the Peabody Academy of Science. *The American Institute of Biological Sciences Bulletin* 7: 21-22.

- 1957b Salem Meeting of the American Association for Advancement of Science; 1869. *Essex Institute Historical Collections* 93: 260-266.
- 1959 An early defence of Darwinism. *The American Naturalist* 93: 138-139.
- 1961 "Salem Day" At Meetings of the American Association for the Advancement of Science. *Essex Institute Historical Collections* 97: 57-60.
- 1965 The "Salem Secession" of Agassiz Zoologists. *Essex Institute Historical Collections* 105: 27-39.
- 1966 Frederic Ward Putnam and the Development of Museum of Natural History and Anthropology in the United States. *Curator* 9: 151-155.
- 1967 Edward S. Morse; As a Zoological Illustrator, with Note on His Handwriting. *Essex Institute Historical Collections* 103: 31-39.
- 1970 Peabody Academy's Caleb Cooke. *The Biologist* 52: 112-119.
- 1974 From Penikese to the Marine Biological Laboratory at Woods Hole; The Role of Agassiz's Students. *Essex Institute Historical Collections* 110: 151-161.
- 1977 Essex County Natural History Society; 1833-1848. *Essex Institute Historical Collections* 113: 38-53.
- 1979a The Impact of Evolutionary Theories on the Salem Group of Agassiz Zoologists. *Essex Institute Historical Collections* 105: 144-171.
- 1979b More on Caleb Cooke's Expedition to Zanzibar; 1860-1865. *The Biologist* 61: 11-15.
- 1980 Natural History at Essex Institute; 1848-1898. *Essex Institute Historical Collections* 106: 21-33.
- 1982 F. W. Putnam as Secretary of the American Association for the Advancement of Science. *Essex Institute Historical Collections* 108: 106-118.

DODGE, Ernest S.

- 1941 An Early letter to the Salem East India Marine Society. *Essex Institute Historical Collections* 77: 254-261.
- 1945 Captain Collector, the Influence of New England Shipping on the Study of Polynesian Material Culture. *Essex Institute Historical Collections* 81: 27-34.

DUNN, L. C.

- 1944 The Naturalist in America. *The American Naturalist* 78: 38-42.

EAST INDIA MARINE SOCIETY OF SALEM

- 1821 *The East India Marine Society of Salem*. Salem.
- 1831 *The East India Marine Society of Salem*. Salem.
- 1837 *Supplement to the catalogue of the articles in the museum, journals, and collections of the East India Marine Society of Salem*. Salem.

ESSEX INSTITUTE

- 1856 *Proceedings of the Essex Institute*, vol. 1.
- 1857 *Proceedings of the Essex Institute*, vol. 2.
- 1865 *Historical notice of Essex Institute*. Salem.
- 1866 *Proceedings of the Essex Institute*, vol. 4.
- 1866-67 *Proceedings of the Essex Institute*, vol. 5.
- 1870 *Proceedings of the Essex Institute*, vol. 6.
- 1871 Report of Semi-centennial Anniversary of the Formation of the Essex Historical Society. *Bulletin of the Essex Institute* 3: 42-48.
- 1873 Twenty-fifth Anniversary. *Bulletin of the Essex Institute* 5: 42-76.
- 1886 *Proceedings of the Essex Institute*, vol. 5(1866-67).
- 1889 *Charter and By-Laws of the Essex Institute with a list of its Officer and Members*.
- 1893 A Memorial of Henry Wheatland. *Historical Collections of the Essex Institute* 30: 127-203.
- 1898 The First Half Century of the Essex Institute. *Bulletin of the Essex Institute* 30: 1-77.

Essex Institute Historical Collections

- 1946 First Home of the Essex Historical Society, Which later became The Essex Institute. *Essex Institute Historical Collections* 82: 383-384.
- FENKINS, L. W. and W. M. WHITEHILL
1944 The Restoration of East India Marine Hall. *The American Neptune* 4: 5-17.
- FOWLER, Samuel P.
1884 An Historical Sketch. *Bulletin of the Essex Institute* 16: 141-145.
- GOODELL, Abner C.
1871 Address (delivered before the Essex Institute on the Semi-centennial Anniversary of the Formation of the Essex Historical Society). *Historical Collections of the Essex Institute* 11: 1-18.
- GOODSPEED, Charles E.
1946 *Nathaniel Hawthorne and the Museum of the Salem East India Marine Society*. Salem: Peabody Museum.
- HAWTHORNE, Nathaniel
1841 A Virtuoso's Collections. *Boston Miscellany* 1(5): 193-200. (reproduced by Goodspeed, 1946)
1985 (1850) *The Custom-House, Introductory to The Scarlet Letter, Masters Library; Nathaniel Hawthorne*. London: Octopus Books Limited.
- HIDY, Muriel E.
1941 George Peabody; An American in London. *Essex Institute Historical Collections* 77: 1-19.
1978 *George Peabody; Merchant and Financier, 1829-1854*. New York: A New York Times Company.
- 金井 円
1979 「セイラム青年の長崎訪問——初版日米交渉史の一節——」『トミーという名の日本人』東京：文一総合出版, pp. 13-30.
- KING, Caroline H.
1937 *When I Lived in Salem; 1822-1866*. Brattleboro: Stephen Daye Press.
- LURIE, Edward
1960 *Louis Agassiz; A Life in Science*. Chicago: The University of Chicago Press.
- MARCOU, Jules
1896 *Life, Letters, and Works of Louis Agassiz*. New York: Macmillan and Norwood Press.
- MARYLAND HISTORICAL SOCIETY
1870 *The Memory of George Peabody*. Baltimore: The Maryland Historical Society.
- 守屋 毅
1983 「モースとセイラム・ピーボディー博物館」小西四郎監修『百年前の日本』東京：小学館, pp. 198-202。
1985a 「モースコレクション覚書 上」『民博通信』29: 7-17。
1985b 「セイラムその日その日」『月刊みんぱく』9(9): 15-17。
1986 「モースコレクション覚書 下」『民博通信』32: 63-70。
n.d. 「モースの日本研究」守屋毅編『モースと日本』東京：小学館 (in press)。
- MORSE, Albert P. (Compiled)
1927 *Bibliography of Edward Sylvester Morse*. (unpublished)
- MORSE, Edward S.
1869 On the early stage of Brachiopodos. *American Naturalist* 3: 384-385.
1883 A New Plan of Museum-Case. *Science* 2: 31, 33.
1884 A New Plan of Museum-Case. *Proceedings of American Association for Advancement of Science* (1883): 362.
1886 *Japanese Homes and Their Surroundings*. Boston: Ticknor & Co.
1900 *A Brief Sketch of the Peabody Academy of Science; 1799-1899*. Salem: The Peabody Academy of Science.

- 1905 Frederick Ward Putnam. *Historical Collections of the Essex Institute* 52: 193-196.
1923 Agassiz and the School at Penikese. *Science* 58: 273-275.

Old Houses of Salem

- 1870 *Old Houses of Salem*. Salem: Salem Press.

OSGOOD, Chas S. and H. M. BATCHELDER

- 1879 *Historical Sketch of Salem*. Salem: Essex Institute.

PARKER, Franklin

- 1960 An Approach to Peabody' Gifts and Legacies. *Essex Institute Historical Collections* 96: 291-296.
1967 George Peabody and the Peabody Museum of Salem. *Curator* 10(2): 137-153.
1971 *George Peabody; A Biography*. Nashville: Vanderbilt University Press.

PEABODY ACADEMY OF SCIENCE

- 1869 *First Annual Report of the Peabody Academy of Science*. Salem.
1871 *Second and Third Annual Reports of the Peabody Academy of Science*. Salem.
1885 *Annual Reports of the Peabody Academy of Science, 1874-84*. Salem.

PHILLIPS, James D.

- 1954 Salem in the Nineties. *Essex Institute Historical Collections* 90: 17-57.

PORTLAND SOCIETY OF NATURAL HISTORY

- 1869 History and Condition of the Portland Society of Natural History; 1866-1869. *Proceedings of Portland Society of Natural History* 1: 193-212.

PUTNAM FREDERICK W.

- 1856a The Catalogue of the Birds of Essex County. *Proceedings of the Essex Institute* 1: 201-202.
1856b The First of a series of papers on the Fishes of Essex County. *Proceedings of the Essex Institute* 1: 144-146.
1856c The Second of a series of papers on the Fishes of Essex County. *Proceedings of the Essex Institute* 1: 148.
1856d The third of a series of papers on the Fishes of Essex County. *Proceedings of the Essex Institute* 1: 201.
1866 *The Naturalist' Directory; Part 2*. Salem: Essex Institute.
1869 Report of the director of the museum. *First annual report of the trustees of the Peabody Academy of Science*, pp. 40-52.
1896 Henry Wheatland. *Proceedings of the American Academy of Arts and Science* 23(n.s): 363-367.

ROBINSON, John

- n.d. *The Peabody Academy of Science; Its Inception*. A bit of private history from Dr. Wheatland, etc., unpublished typewritten manuscript in files of the Peabody Museum of Salem (quoted by Whitehill, 1946).

ROBOTTI, Frances D.

- 1948 *Chronicles of Old Salem, A History in Miniature*. Salem: Newcomb and Gauss Co.

園田英弘

- n.d. 「ニューイングランドにおけるモースの知的環境」守屋毅編『モースと日本』東京：小学館 (in press)。

UPHAM, Willam P.

- 1895 Memoir of Henry Wheatland. *Proceedings of the Massachusetts Historical Society* 9: 276-300.

潮木守一

- 1979 『大学と社会』東京：第一法規出版。

渡辺正雄

- 1976 『日本人と近代科学——西欧への対応と課題——』東京：岩波書店。

WAYMAN, Dorothy G.

1943 *Edward Sylvester Morse; A Biography*. Cambridge: Harvard University Press.

ウェイマン

1976a 『エドワード・S・モース』上 蜷川親正訳 東京：中央公論美術出版。

1976b 『エドワード・S・モース』下 蜷川親正訳 東京：中央公論美術出版。

WHITEHILL, Walter M.

1949 *The East India Marine Society and the Peabody Museum of Salem*. Salem: The Peabody Museum of Salem.

1950 *The One Hundred and Fiftieth Anniversary Celebration of the Peabody Museum of Salem*. Salem: Peabody Museum of Salem.

1959 The Topography of Essex County in 1859. *Essex Institute Historical Collections* 95: 69-81.